山梨県韮崎市

水無遺跡

県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1996

韮崎市教育委員会
峡北土地改良事務所

山梨県韮崎市

水　無　遺　跡

県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1996

韮崎市教育委員会
峡北土地改良事務所

序　　文

韮崎市では、近年県営圃場整備事業等の大規模開発に伴い、数多くの遺跡が発掘調査され貴重な文化財が発見されています。この度発刊された本報告書は、そのような貴重な発見が相次ぐ大規模開発の一端として平成７年度県営圃場整備事業に伴い発掘調査された水無遺跡の報告書であります。

水無遺跡からは平安時代の住居や水田が発見されました。遺跡から出土した遺物は当時の生活用品である土師器・須恵器が主体となっており、貴重な資料を得ることができました。これらの資料は文化遺産として、永く後世に伝えていかなければならないものです。報告書はそれらの文化財を記録にとどめたものであり、本書が我々の先人の生活と歴史をときあかすための手助けになればと願っております。

末筆ですが、遺跡の発掘調査並びに報告書作成に伴い、多大なる御理解と御協力を賜った関係諸機関及び関係者の皆様方に深く感謝を申し上げます。

平成８年３月31日

韮崎市教育委員会

教育長　志村良典

例　　言

1　本書は、県営圃場整備事業に伴う水無遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、峡北土地改良事務所負担金、文化庁・山梨県の補助金を受け、韮崎市教育委員会が実施した。

3　本報告書の作成並びに整理作業は、韮崎市教育委員会社会教育課が行った。

4　八稜鏡は帝京大学山梨文化財研究所において保存処理を行った。

5　凡　例

①　遺構の番号は発掘調査現場において付けたものである。

②　縮尺は各挿図ごとに示した。挿図中のドットは焼土をあらわす。

③　遺構断面図の水糸標高（m）は数字で示した。

④　挿図断面図の　は石をあらわす。

⑤　歴史時代土器断面、白ぬきは土師器、黒は須恵器、網点は陶器をあらわす。

⑥　写真図版中遺物に付けられた番号は、実測図の番号と対応する。

6　発掘調査及び報告書作成に当たり、多くの方々から御指導・御協力をいただいた。一々御芳名を上げることは割愛させていただくが、厚く御礼を申し上げる次第である。

7　発掘調査、整理によって出土並びに作成された遺物及び資料は、韮崎市教育委員会において保管している。

調　査　組　織

1　調査主体　　韮崎市教育委員会

2　調査担当　　山下孝司（韮崎市教育委員会社会教育課）

3　調査参加者

越石政幸・越石孝子・真壁ふみか・山形郁子・内藤勝子・細田すみ江・内藤道子・細田圭子・内藤治子・中嶋香代子・内藤ゐなみ・内藤隆子・深沢あい子・深沢玉枝・山形満江・深沢真知子・石原ひろみ・小野初美・青山みち枝・三井福江・清水由美子・功刀まゆみ

4　事 務 局（韮崎市教育委員会社会教育課）

教育長　志村良典、課長　深谷　卓、課長補佐　深沢義文、係長　内藤晴人、野口文香

目　　次

序　　文
例　　言
目　　次
挿図目次
写真図版目次

Ⅰ　発掘調査の経過と概要 …… 1

Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 1

1　遺跡の立地
2　周辺の遺跡

Ⅲ　遺跡の地相概観 …… 2

Ⅳ　調査の方法 …… 2

Ⅴ　遺　　構 …… 6

Ⅵ　遺　　物 …… 11

Ⅶ　水無遺跡出土八稜鏡 …… 19

Ⅷ　ま と め …… 27

写真図版

挿　図　目　次

第１図　水無遺跡①と周辺遺跡 …… 3

第２図　水無遺跡位置図 …… 4

第３図　水無遺跡全体図 …… 5

第４図　１号土坑平・断面図 …… 6

第５図　１号住居址平・断面図 …… 7

第６図　２号住居址平・断面図 …… 8

第７図　１号凹地平・断面図 …… 9

第８図　第１水田跡平・断面図 …… 9

第９図　第２水田跡平・断面図 …… 10

第10図　１号住居址出土遺物 …… 13

第11図　２号住居址出土遺物 …… 14

第12図　１号凹地出土遺物 …… 15

第13図　遺構外出土遺物 …… 15

第14図　遺構外出土遺物 …… 16

第15図　遺構外出土遺物 …… 17

第16図　鏡部位名称 …… 19

第17図　水無遺跡出土八稜鏡 …… 19

第18図　山梨県八稜鏡出土遺跡位置図 …… 21

第19図　県内出土の八稜鏡 …… 22

第20図　宮ノ前遺跡出土和鏡 …… 25

写 真 図 版 目 次

図版１　遺跡遠景、発掘風景

図版２　１号土坑、発掘風景

図版３　１号住居址土層、１号住居址

図版４　実測風景、１号住居址完掘

図版５　遺跡近景、鋤鎌がけ

図版６　実測風景、２号住居址

図版７　２号住居址カマド実測風景、２号住居址完掘

図版８　発掘風景、１号凹地

図版９　遺跡近景、第１水田跡

図版10　第２水田跡、遺跡近景

図版11　遺跡近景

図版12　１号住居址出土遺物、２号住居址出土遺物

図版13　２号住居址出土遺物

図版14　２号住居址出土遺物

図版15　１号凹地出土遺物、遺構外出土遺物

図版16　遺構外出土遺物

図版17　遺構外出土遺物

図版18　遺構外出土遺物

図版19　遺構外出土遺物、遺跡出土黒曜石

図版20　２号住居址出土鏡

Ⅰ　調査に至る経緯と概要

平成７年度県営圃場整備事業に伴い、本市教育委員会では韮崎市圃場整備室から依頼を受け、事業予定地区を平成６年度に踏査及び試掘を行い、遺跡の存在を確認した。その結果をもとに、峡北土地改良事務所・山梨県教育庁文化課・市教育委員会で協議を行い、水無遺跡について、圃場整備事業に先立って面積約3,000㎡を対象として発掘調査を行い、記録に留め永く後世に伝えることとした。

発掘調査は、平成７年９月初旬より開始し約３ヵ月間行った。引き続き、遺物等の整理作業を行い、報告書作成までの作業が完了したのは、平成８年３月であった。

Ⅱ　遺跡の立地と環境

１　遺跡の立地

水無遺跡は山梨県韮崎市円野町下円井字水無地内に所在した。

韮崎市は、山梨県の北西部に位置し、甲府盆地の北西端を占めている。市内を貫流する釜無川・塩川により、地形的にほぼ山地・台地・平地の三地域に分けられる。

韮崎市の西部は、南アルプスの連峰が連なり、その前後に階段状に山々が屹立している。これらの山々からは大小の渓流が流れ出しそれぞれ扇状地をつくりだしている。扇状地の末端は南東流する釜無川によって浸食され急崖となり河岸段丘を形成している。段丘上は山麓の台地と緩傾斜の平坦面に分かれ、台地上は駿信往還が通る交通の要路となっており、中世には辺境武士団武川衆の拠点でもあった。水無遺跡はこのような釜無川右岸河岸段丘の標高約453ｍ水田・畑下に発見された。

２　周辺の遺跡

番号	遺跡名	時代区分	備考
①	水無遺跡	平安	
②	二反田遺跡	弥生・奈良・平安	平成５年度　韮崎市教育委員会調査
③	半縄田遺跡	奈良・平安	平成６年度　韮崎市教育委員会調査
④	北堂地遺跡	縄文・平安・中世・近世	平成２年度　韮崎市教育委員会調査
⑤	堂地遺跡	縄文・平安・明治	
⑥	宇波円井遺跡	縄文	

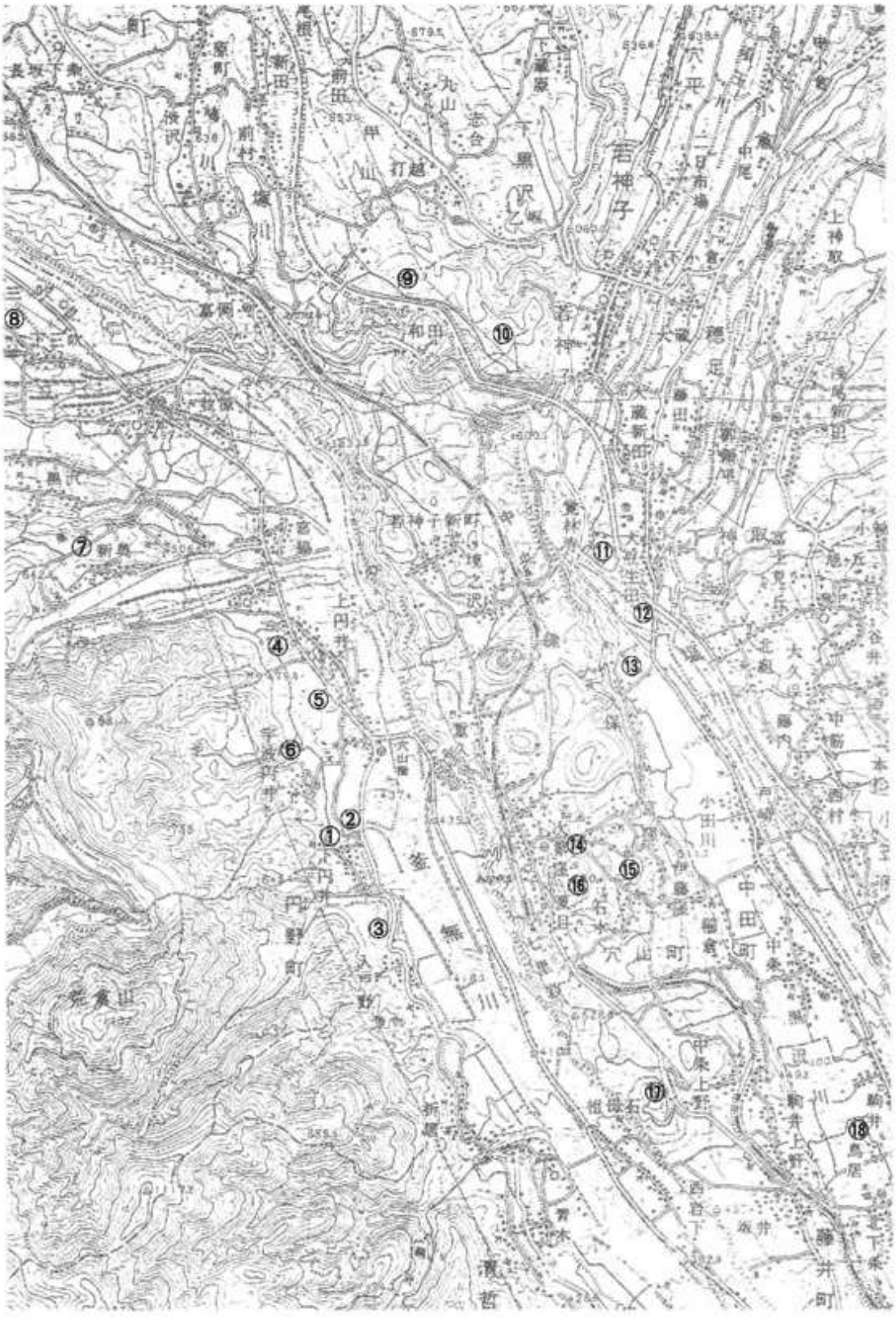
番号	遺跡名	時代区分	備考
⑦	向原遺跡	縄文・奈良・平安	昭和59年度　武川村教育委員会調査
⑧	宮間田遺跡	平安	昭和60・61年度　武川村教育委員会調査
⑨	湯沢遺跡	平安	昭和58年度　高根町教育委員会調査
⑩	大小久保遺跡	平安	昭和57年度　須玉町教育委員会調査
⑪	大豆生田遺跡	縄文・弥生・平安	昭和49年度　山梨県教育委員会調査
⑫	大豆生田砦遺跡	中世	
⑬	上本田遺跡	縄文・奈良・平安	平成３年度　韮崎市教育委員会調査
⑭	宿尻遺跡	縄文・平安	平成３年度　山梨県埋蔵文化財センター調査
⑮	伊藤窪第２遺跡	縄文・古墳・中世	平成２年度　韮崎市遺跡調査会調査
⑯	能見城	中世城郭	
⑰	新府城跡	中世城郭	国定指定史跡
⑱	宮ノ前遺跡	縄文・弥生・奈良・平安	平成元～２年　韮崎市遺跡調査会調査

Ⅲ　遺跡の地相概観

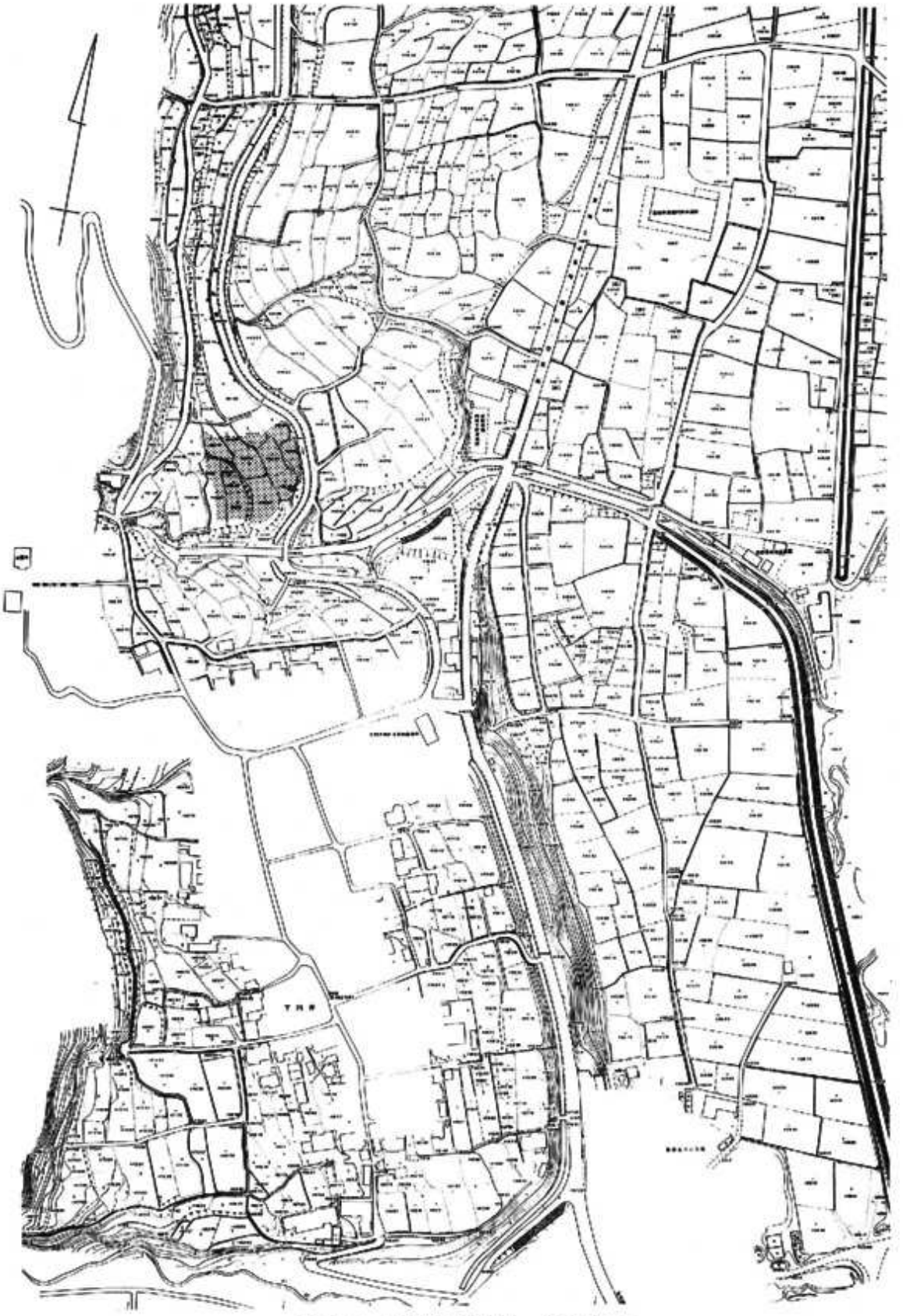
水無遺跡は、下円井集落の北側段丘上に位置する。西から東に向かって傾斜をもった半円形に張り出した台地で、東側は徳島堰が南流し、圃場整備された水田が広がっている。徳島堰東側は平成５年度に発掘調査された二反田遺跡があったところである。調査区域南端の土層を観察すると、水田床土下には暗褐色系土～黒褐色土層が形成され、それを取り除くと砂質土となる。暗褐色系土～黒褐色土層中には砂層が入りこんでおり何回かの氾濫が予想される。遺構は暗褐色土中に掘り込まれていた。

Ⅳ　調査の方法

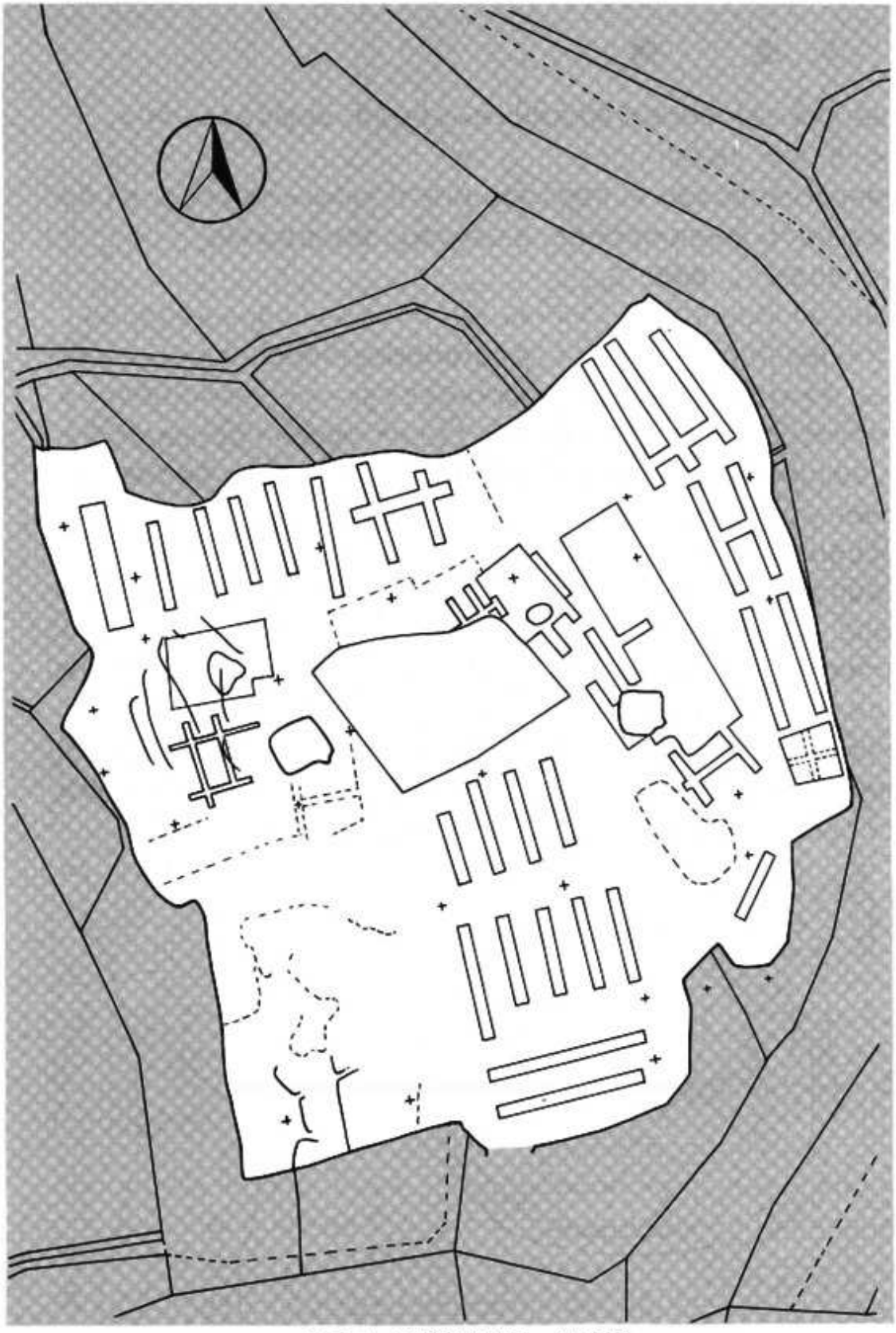
地形を考慮し任意に５ｍ方眼を設定し調査を行った。耕作土・表土を排除した後、任意にグリッドやトレンチを設定し掘下げを行い、遺構が確認されたところは拡張して遺構を掘り下げ調査を行った。



第１図　水無遺跡①と周辺遺跡　（1／50,000）



第2図　水無遺跡位置図　(1／2,500)



第3図　水無遺跡全体図　(1／500)

V 遺　　構

調査の結果発見された遺構は、竪穴住居址２軒のほかに土坑・水田跡などとなっている。

＜１号土坑＞　（第４図）

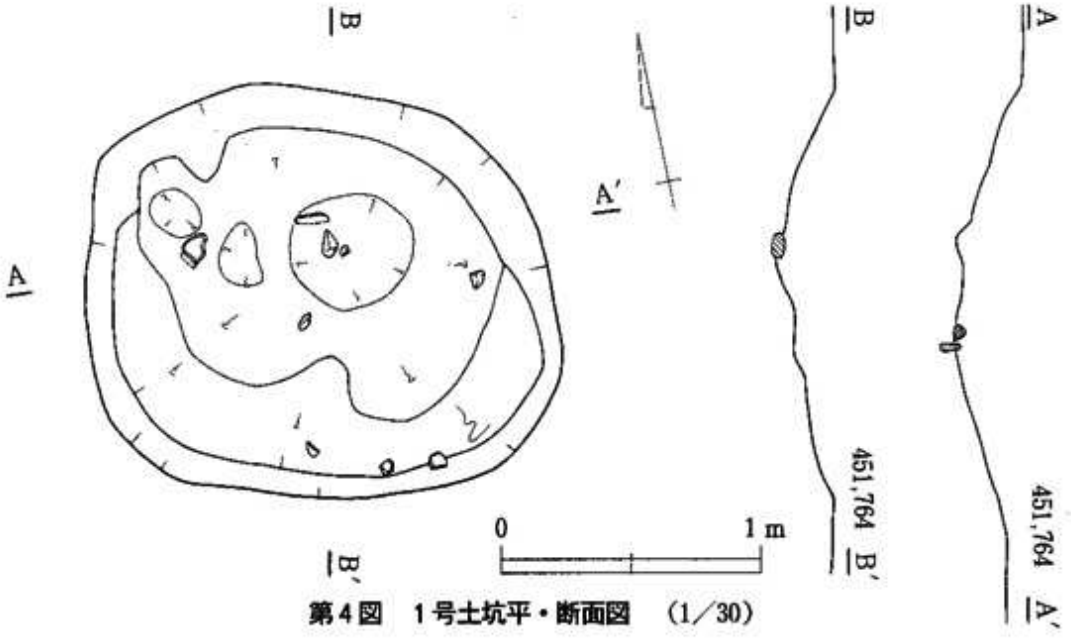
調査区域中央東側に位置する。平面形は不整の楕円形で、1.6×1.8ｍの規模をもつ。浅く斜めに落ち込む穴で、25cm前後の深さがある。出土遺物は無く、遺構の性格は不明。

＜１号住居址＞　（第５図）

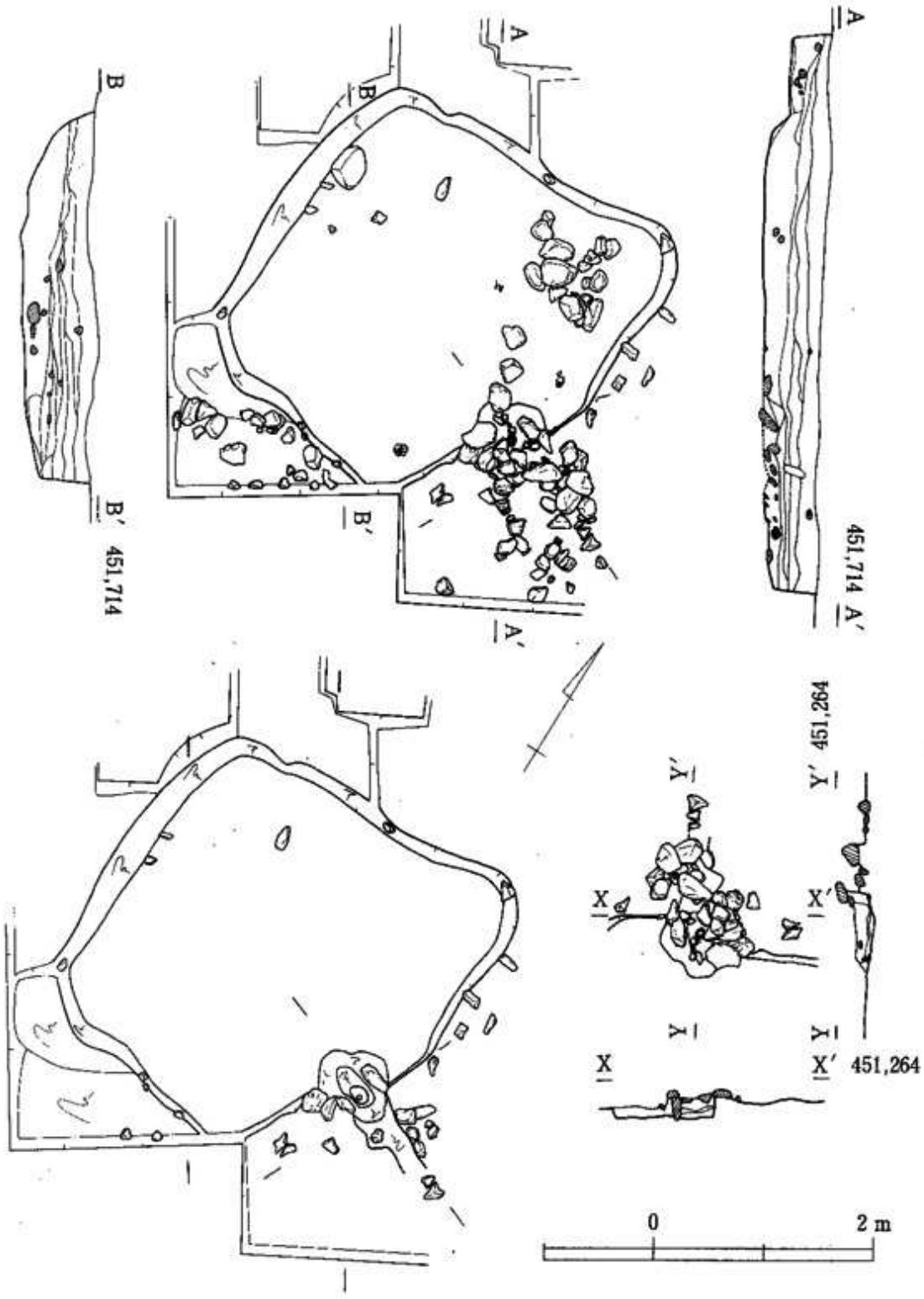
調査区域中央東側に位置する。トレンチ掘り下げによって黒褐色土の落ち込みを発見、拡張してプラン確認の後住居跡として発掘する。住居址内には黒褐色土が埋没しており大きさは東西約3.5ｍ、南北約3.5ｍで、平面形態は基本的に隅円方形を呈するが、カマド南側から住居角にかけて壁は内側よりとなっている。壁は外傾しながら立ち上がり、確認面からは20cm前後の深さがある。底面はほぼ平坦。柱穴等の内部施設は確認されなかった。カマドは東側に石組で構築され、東西約1.5ｍ、南北約90cmの大きさをもつ。

＜２号住居址＞　（第６図）

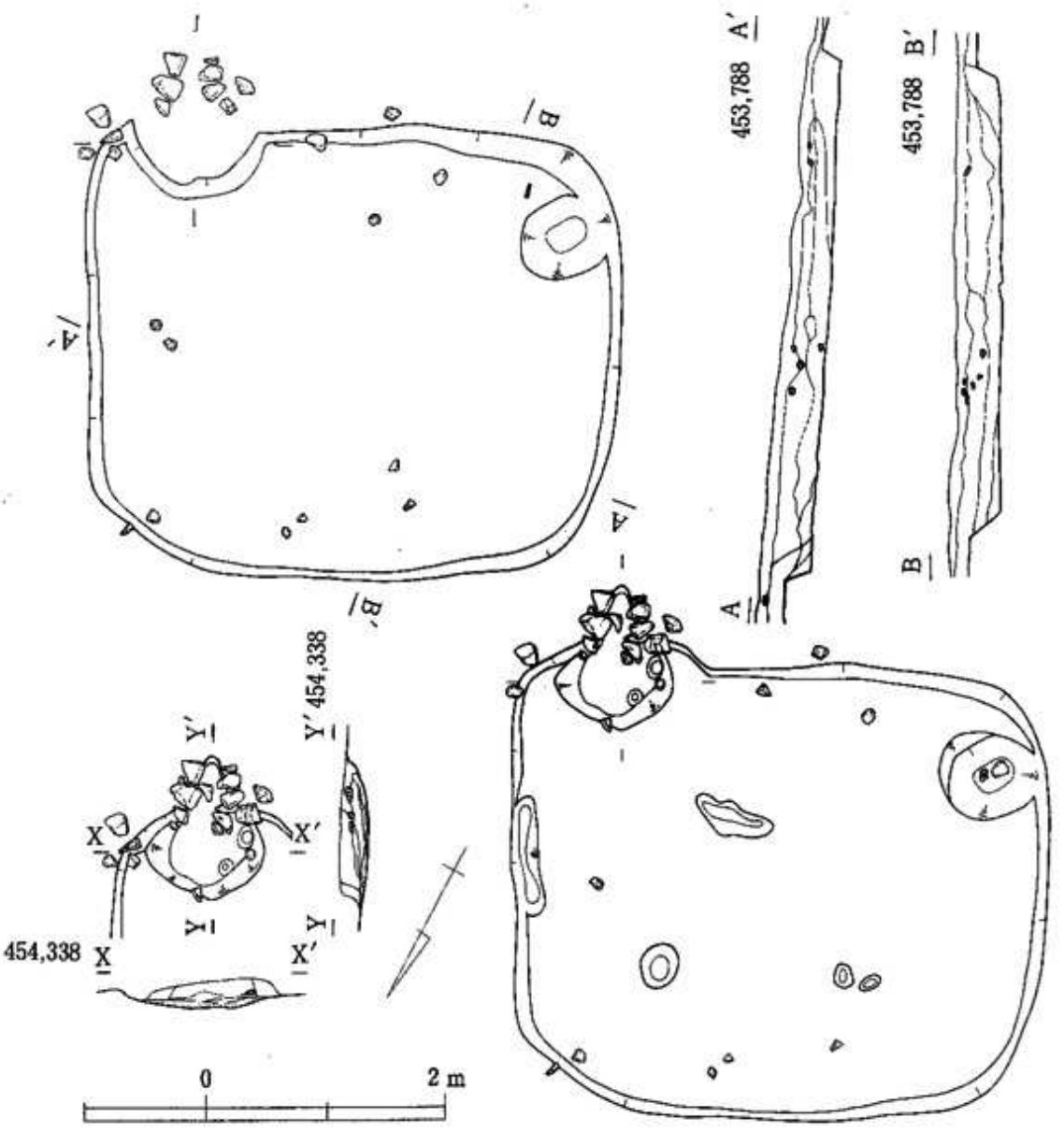
調査区域中央西側に位置する。グリッド掘り下げによって暗褐色土の落ち込みを発見、土器が出土し、カマドの袖石らしき石が確認されたので、グリッド内においてプランを確認し住居跡として発掘する。平面形は隅円長方形を呈する。東西約4.5ｍ、南北約3.7ｍの大きさで、壁は外傾しながら立ち上がり、確認面からの深さは20cm前後である。床面は西から東にかけてやや斜めになっている。カマドは南壁東寄りに石組で構築され、東西１ｍ、南北1.2ｍの大きさをもつ。周溝は無いが、東壁中央に長さ1ｍ、幅15cmの溝がある。南東端には径約70cm、深さ30cm程の擂鉢状の穴がある。ほかに４ヵ所ピットが検出されたが、柱穴ではないだろう。



第４図　１号土坑平・断面図　（1／30）



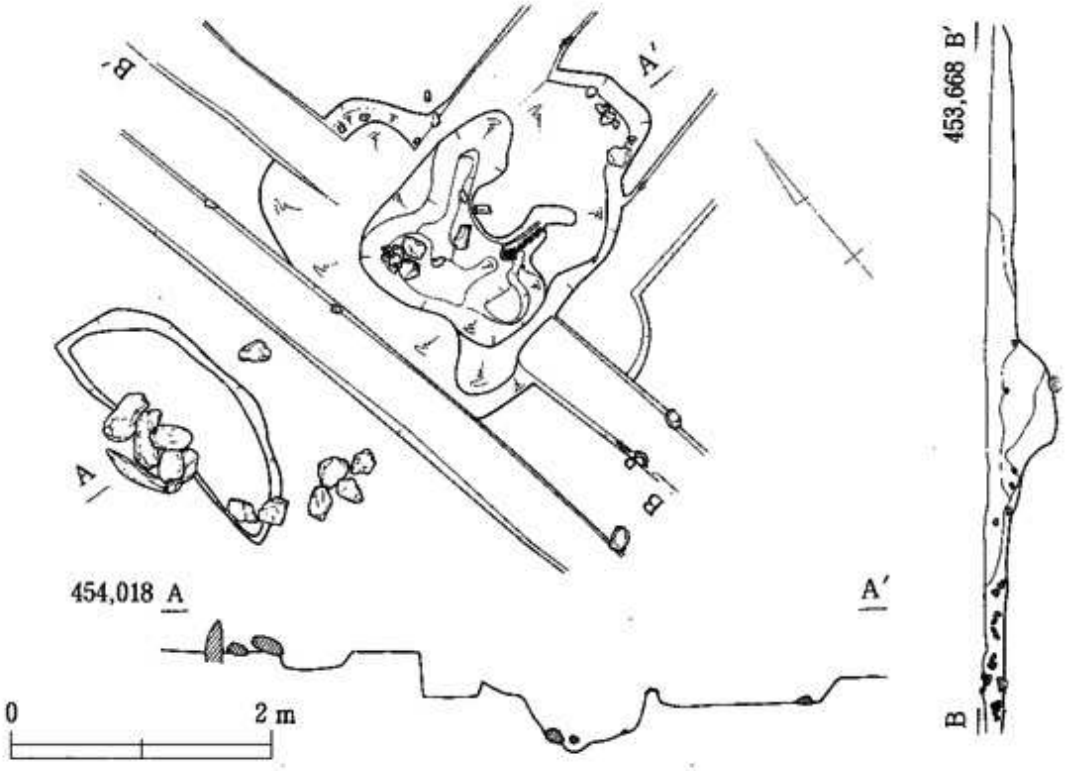
第5図　1号住居址平・断面図　(1／60)



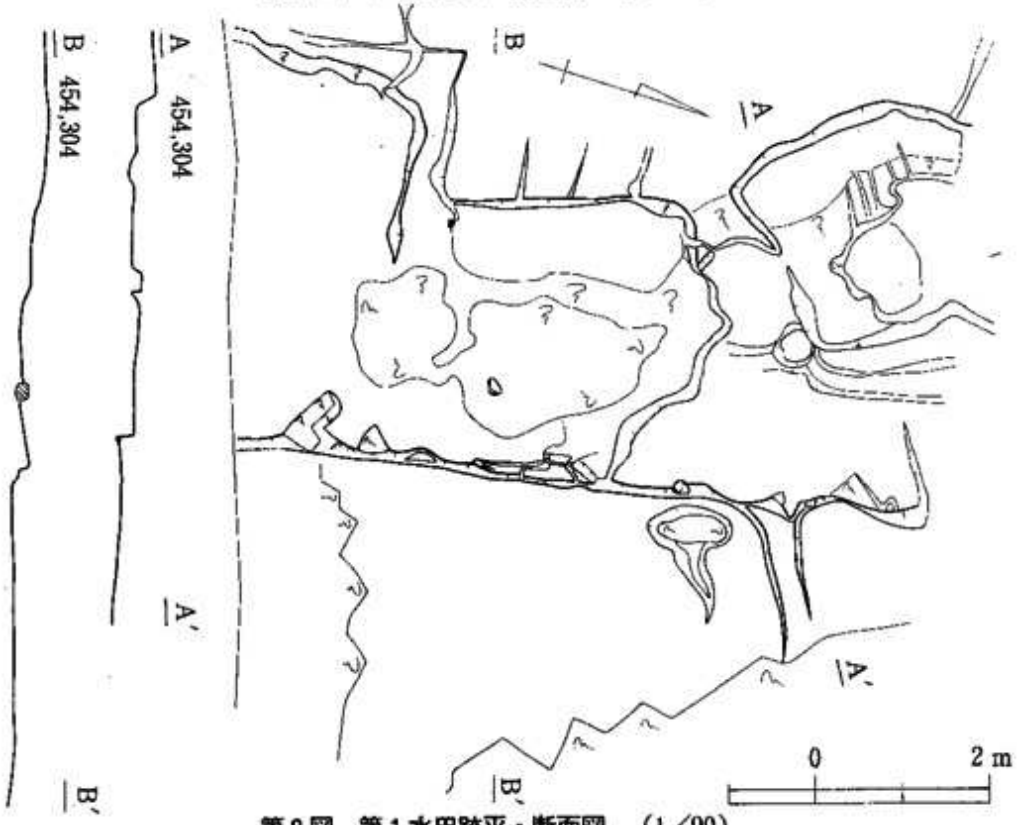
第6図　2号住居址平・断面図　(1／60)

＜1号凹地＞　(第7図)

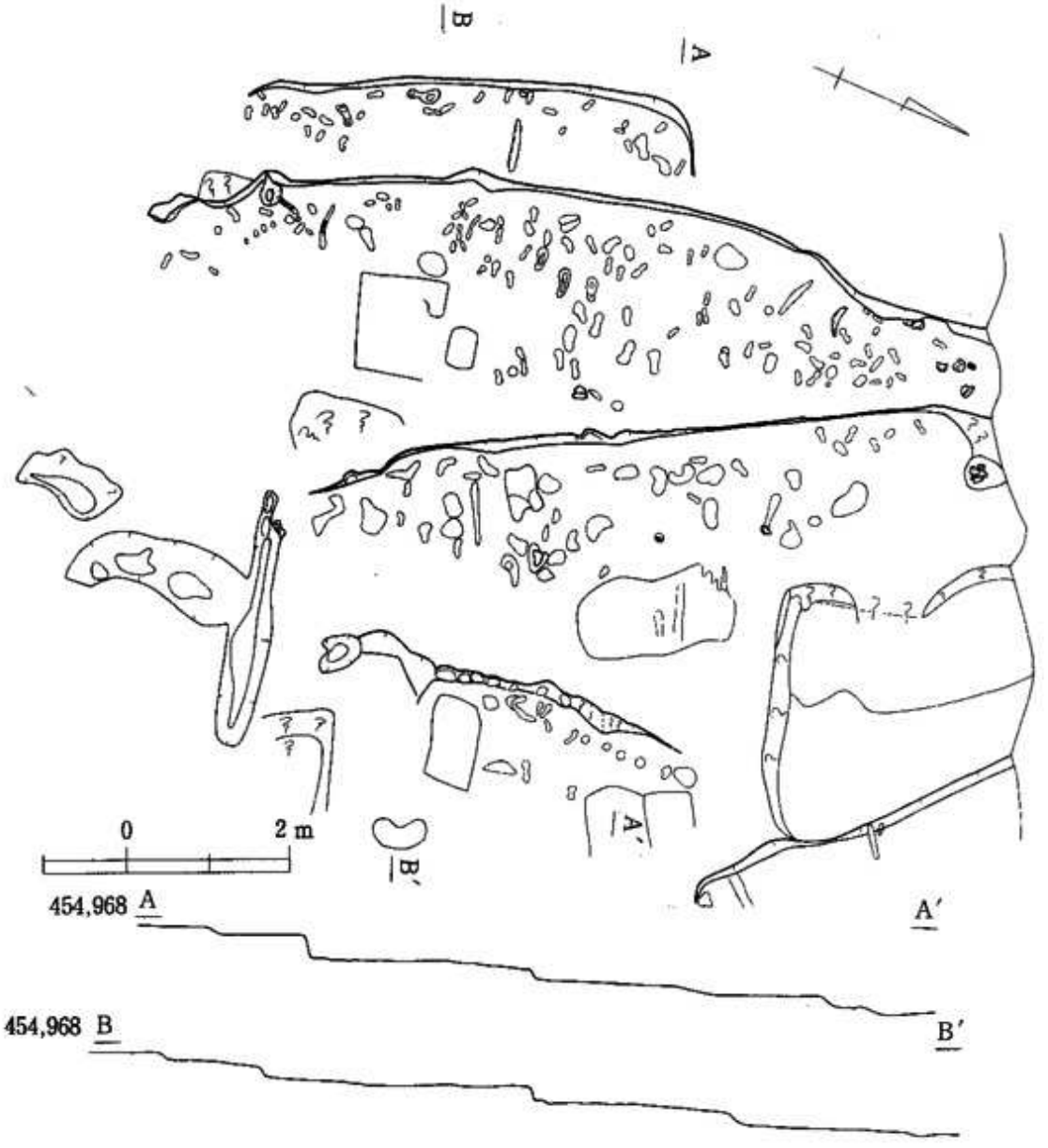
調査区域中央から北西側、2号住居址の北西に位置する。グリッド掘り下げに際して暗褐色土の落ち込みを確認し、また西側に検出された石をカマドと考え当初3号住居址として発掘するが、掘り下げの結果住居ではなく不定型な穴となったので、遺構名称を凹地に改め発掘した。土層断面で観察すると、径2.8m程に浅くくぼみ、中央で径1mの大きさで深く落ち込む。深さは中央部分の一番深いところでグリッド面から約75cmある。炭化材と土師器破片が僅かに出土しているが、本遺構の性格は不明である。西側の集石の部分周辺からも土師器の極小さい破片が出土しているが、掘り下げの様子では焼土や明確な落ち込みが確認されなかった。



第7図　1号凹地平・断面図　(1／60)



第8図　第1水田跡平・断面図　(1／90)



第9図　第2水田跡平・断面図　(1／90)

<第1水田跡>　(第8図)

調査区域南西側に位置する。排土作業並びに鋤鎌がけに際して、砂の埋没した区画を発見し、砂を取り除く発掘作業を実施。4面程の小区画水田が確認され、畦道らしきものもみられたが、排土作業により削られてしまった部分が多い。遺物はなく時期不明。

<第2水田跡>　(第9図)

調査区域西側に位置する。砂の埋没した区画を発見し、砂を取り除く発掘作業を実施。部分的ではあるが5面の長方形区画の水田が確認された。出土遺物がなく時期不明であるが、水田遺構確認面の下に平安時代の遺構があるので、それ以後のものと思われる。

Ⅵ 遺　　物

本遺跡から出土した遺物は、1号・2号住居址に伴うものが主体で、水田跡からは、遺構の時代を特定できる遺物はほとんど出土しなかった。

＜1号住居址出土遺物＞　（第10図）

（単位　cm）

番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径	胎土	色調（内面/外面）	整形・特徴・その他
1	須恵器	坏	－，　－，　5.6	白色粒子を含む	灰色	底部糸切り後ヘラ削り　1／3残
2	土師器	皿	－，11.8，　－	赤色粒子と少量の金雲母を含む	橙色 明赤褐色	内面－暗文が見られるが不鮮明　口縁部破片
3	土師器	蓋	鈕径6.0 －，　－，　－	赤色粒子を含む	橙色 橙色一部にぶい橙色	内面－渦巻状暗文 外面－ロクロによるヘラ削り 底部削り出し高台　2／3残
4	土師器	蓋	鈕径5.0 3.7，16.2，　－	赤色粒子と少量の金雲母を含む	橙色 橙色一部浅黄橙色	内面－渦巻状暗文　1／3残
5	土師器	鉢	－，35.0，　－	金雲母を多量に含む砂粒	明赤褐色とにぶい赤褐色	内面－口縁部、胴部共に横刷毛目 外面－口縁部横撫で、胴部縦方向刷毛目　口縁部破片
6	土師器	甕	－，　－，　5.8	金雲母を多量に含む	暗褐色～暗赤褐色	内面－横刷毛目 外面－縦刷毛目 底部木葉痕　胴部～底部破片
7	土師器	甕	－，　－，　8.8	金雲母を多量に含む砂粒	橙色～にぶい褐色 灰褐色	内面－横方向刷毛目 外面－縦方向刷毛目 底部木葉痕　底部破片
8	白磁	碗	－，14.0，　－	精製	明緑灰色	口縁部破片

＜2号住居址出土遺物＞　（第11図）

（単位　cm）

番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径	胎土	色調（内面/外面）	整形・特徴・その他
1	灰釉陶器	碗	5.9，14.9，　6.8	黒・白色粒子を含む	灰白色	内面－煤付着 底部付高台、漬け掛け　3／4残
2	灰釉陶器	碗	－，13.8，　－	密 白色粒子を含む	灰白色	口縁部に小さく抉りがある 漬け掛け　口縁部破片
3	土師器	皿	2.8，　9.0，　4.6	多量の金雲母を含む	にぶい赤褐色	一部煤けている 底部回転糸切り痕あり　完形
4	土師器	甕	－，　－，18.0	粗い砂粒を含む	にぶい赤褐色 赤褐色	外面－縦方向のヘラ削り調整　底部破片
5	－	素焼の土器	－，23.0，　－	白・赤色粒子を含む	暗赤灰色	内面－ヘラ調整と刻み目がみられる 外面－器面は粗いヘラ調整がしてある　口縁部破片
6	土師器	羽釜	－，31.8，　－	白色粒子、金雲母を含む	にぶい黄橙色	内外面－横撫で　口縁部破片
7	土師器	羽釜	－，29.4，　－	金雲母少量と白・赤色粒子を含む	橙色 にぶい橙色	内外面－撫で調整　破片
8	土師器	片口	4.0，　8.1，　5.7	粗 砂粒を含む	にぶい黄橙色～明褐色 灰黄褐色	内外面に指で撫でた痕がみえる 作りが雑で不均整　ほぼ完形
9	石器					石材、安山岩

＜1号凹地出土遺物＞　（第12図）

（単位　cm）

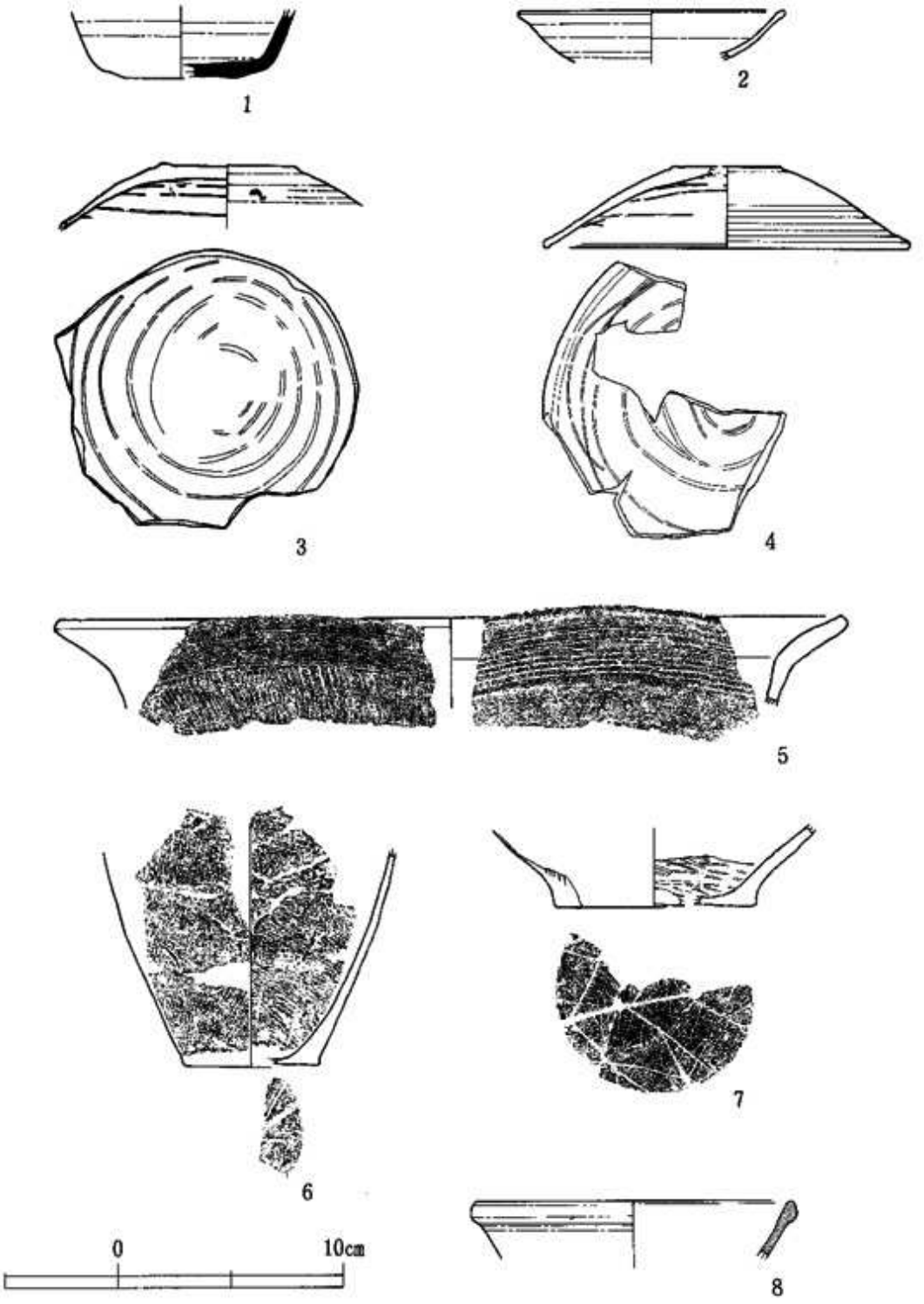
番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径	胎土	色調（内面/外面）	整形・特徴・その他
1	土師器	坏	－，12.0，　－	白色粒子を含む	にぶい黄橙色	内外面－ロクロ撫で　口縁部破片

番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径	胎土	色調（内面/外面）	整形・特徴・その他
2	土師器？	壺	—，18.0，—	白色粒子の多い砂粒を含む	橙色	内面—指頭痕が残る雑な撫で 外面—〔口縁～頸部〕刷毛目を施した後横撫で整形 〔胴部〕縦方向に刷毛目 口縁部——部黒斑あり　口縁部～頸部破片
3	土師器	甕	—，—，7.2	赤・白色粒子を含む	橙色	底部—糸切り後ヘラ削り 底部破片

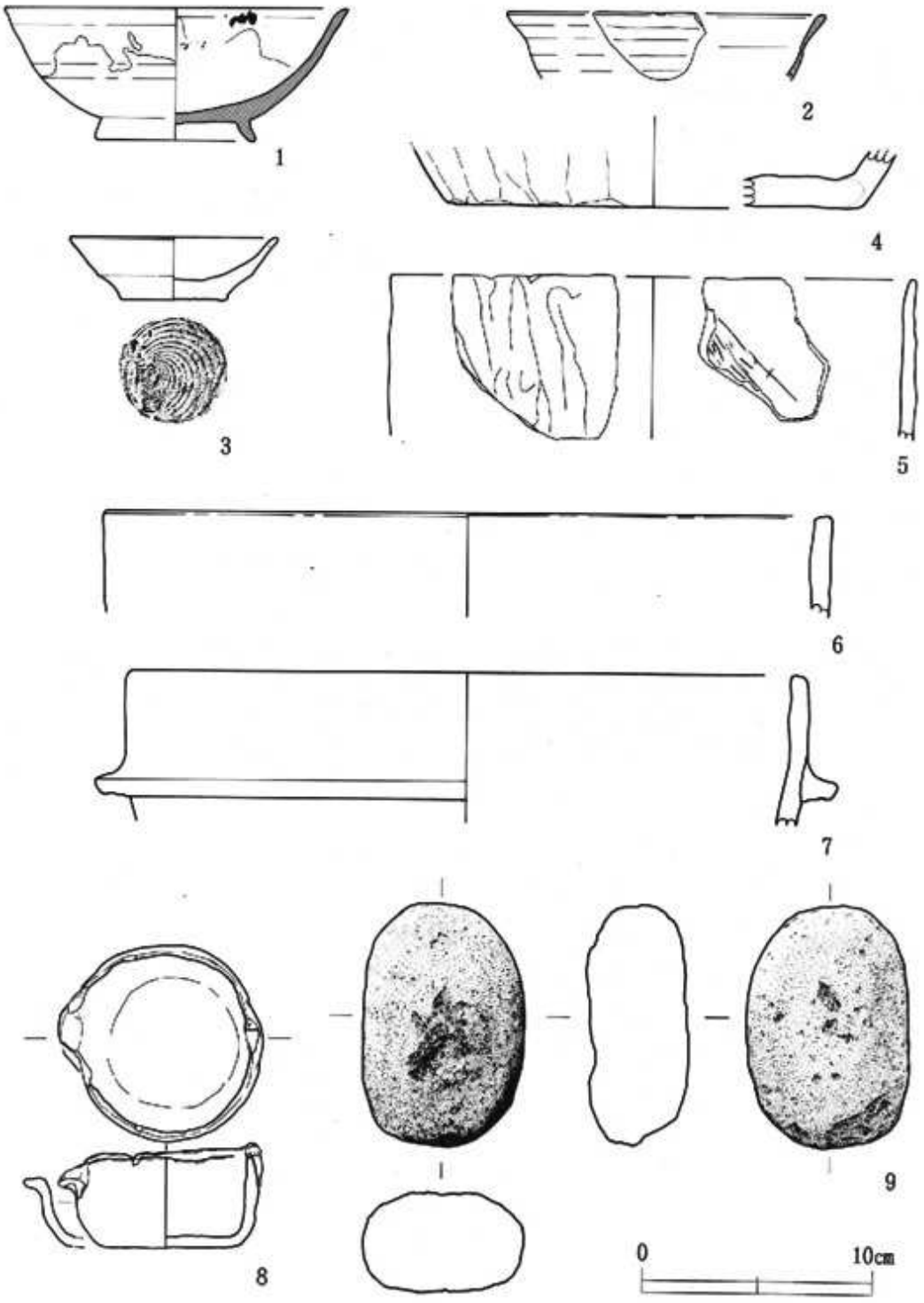
＜遺構外出土遺物＞　（第13・14・15図）

（単位　cm）

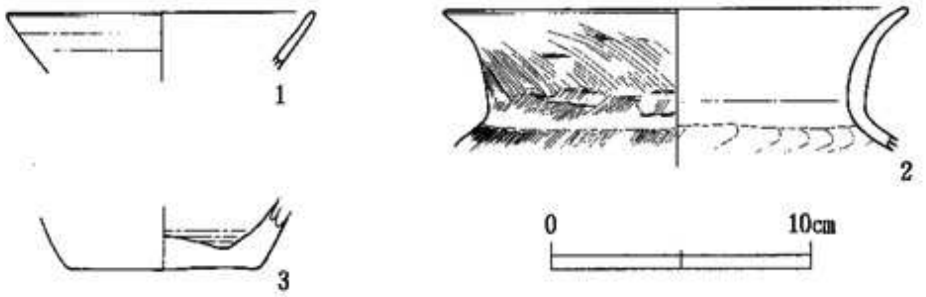
番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径	胎土	色調（内面/外面）	整形・特徴・その他
1	縄文土器	深鉢	—，—，—	多量の白・黒色粒子を含む	褐灰色 灰褐色	内面—横撫で 外面—隆帯による区画文の間に縦の沈線が施されている 破片
2	縄文土器	深鉢	—，—，—	雲母、赤・白色粒子を含む	白褐色	内面—太い沈線が横走する 破片
3	縄文晩期土器	深鉢	—，—，—	砂粒を含む	にぶい黄橙色	口縁部——条の沈線と瘤状の小突起が貼付されている 口縁部—横走する太い一本の沈線 口縁部破片
4	縄文晩期土器	鉢	—，—，—	細かい砂粒を含む	にぶい橙色	内外面—朱塗り 口縁部に浮線網状文の一部と思われる沈線が施されている 穿孔あり　破片
5	縄文土器	深鉢	—，—，—	砂粒を含む	橙色	撫り消し縄文の上に横走する沈線が施されている　破片
6	弥生土器	甕	—，—，—	金雲母、白色粒子を含む	浅黄橙色 にぶい黄橙色	内面—磨き 外面—口縁に櫛描波状文が横走する 口縁部破片
7	弥生土器	壺	—，18.0，—	細かい砂粒を含む	にぶい橙色	横撫で 口縁部破片
8	弥生土器	壺	—，—，—	赤・白・黒色粒子を含む	にぶい褐色～にぶい橙色	底部—回転糸切り痕 破片
9	弥生土器	甕	—，—，—	金雲母、白色粒子を含む	黒褐色 褐灰色	外面—縦条線を施した上に横走する櫛描波状文がみられる　破片
10	弥生土器	甕	—，—，—	白・黒色粒子を含む	にぶい橙色 橙色	内面—横撫で 外面—波状文が施されている　破片
11	弥生土器	甕	—，—，—	金雲母、白色粒子を含む	浅黄橙色 暗褐色	外面—横走する櫛描波状文がみられる 破片
12	須恵器	蓋	鈕径 2.6 —，—，—	細かい白色粒子を含む	黄灰色	内面—ロクロ撫で 外面—ロクロによる削り 擬宝珠状鈕　鈕部破片
13	須恵器	坏	—，—，7.0	赤・白色粒子を含む	灰白色 灰色	底部—回転糸切り痕 破片
14	須恵器	甕	—，—，—	砂粒を含む	灰色 黒褐色	外面—叩き目 破片
15	須恵器	甕	—，20.0，—	粗い白色粒子を含む	褐灰色	内面—指頭痕のみられる雑な撫で 外面—叩き目　口縁部破片
16	土師器	坏	4.7，12.1，6.0	白色粒子を含む	黒色 橙色一部にぶい橙色	内黒 体部～底部破片
17	土師器	坏	4.0，11.8，7.0	赤色粒子を含む	橙色　一部にぶい橙色	外面—ロクロによる整形 底部磨滅により不鮮明、回転ヘラ削り 1／5残
18	土師器	坏	3.9，10.8，4.8	雲母と赤・白色粒子を含む	橙色 にぶい赤褐色	内面—放射状暗文 外面—体部下半ヘラ削り　破片
19	土師器	坏	—，—，6.7	やや粗い赤色粒子と細かい黒色粒子を含む	にぶい橙色	内面—撫で 外面—回転ヘラ削りか？ 底部削り出し高台　破片
20	土師器	坏	—，—，9.8	粗い白・赤色粒子を含む	橙色～にぶい橙色	底部回転糸切り痕 1／2残
21	土師器	坏	2.7，5.5，2.6	白・黒色粒子を含む	にぶい橙色	ロクロによる成形 底部回転糸切り痕　2／3残
22	土師器	高坏	—，—，—	赤色粒子を含む	橙色	脚部内面—ヘラ削り？ 脚部外面—縦方向のヘラ磨き？磨滅により不鮮明 脚部に孔が２つ確認出来る　脚部破片



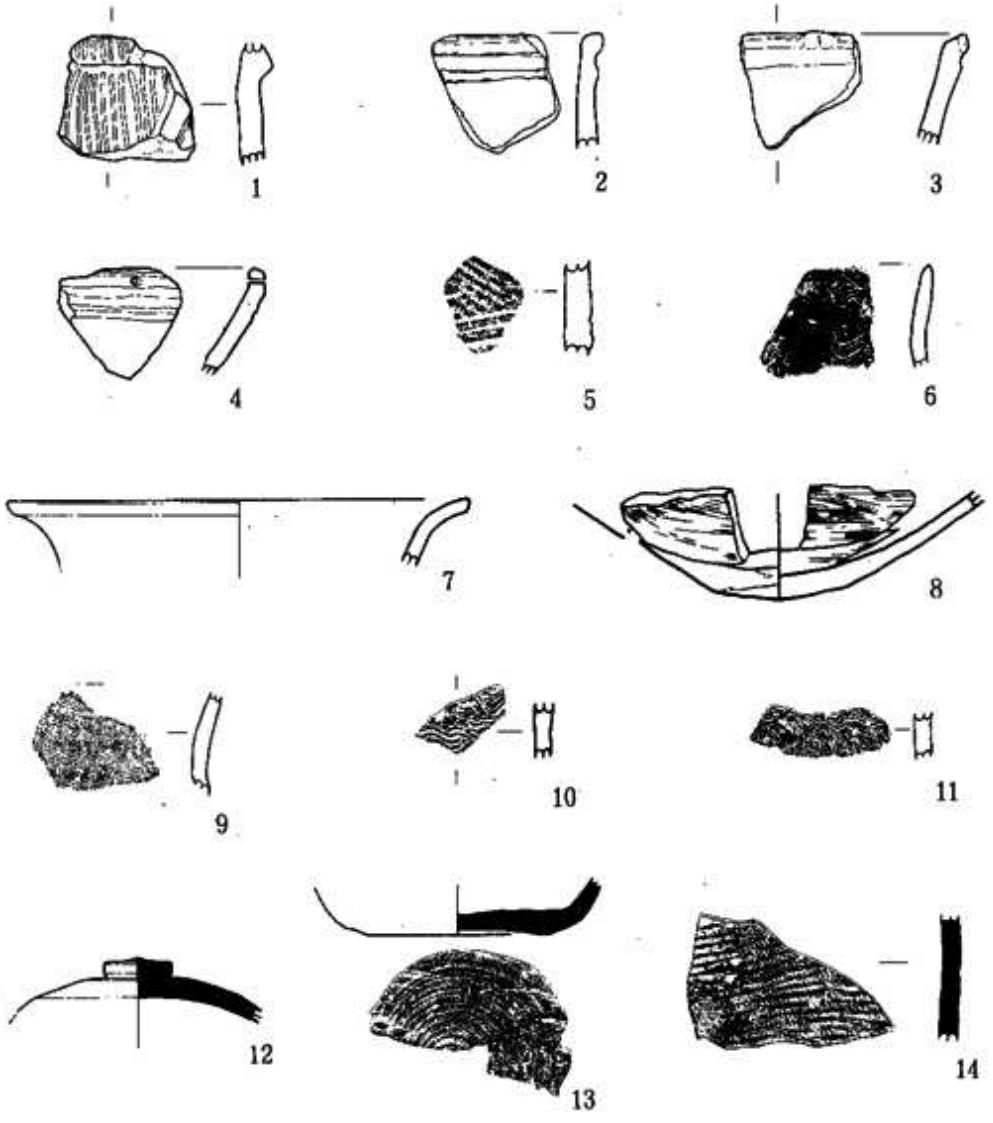
第10図　1号住居址出土遺物　(1/3)



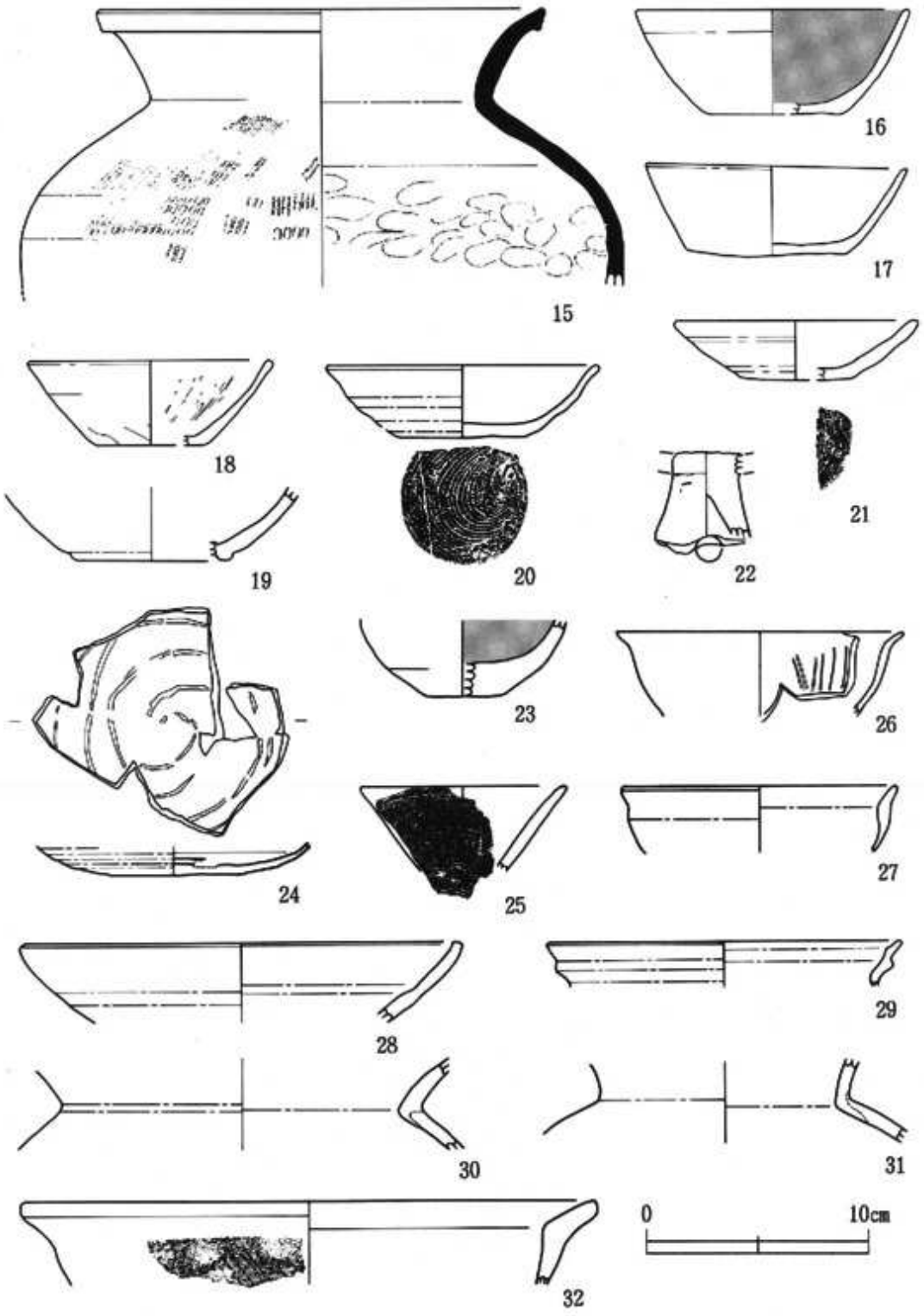
第11図　2号住居址出土遺物　(1／3)



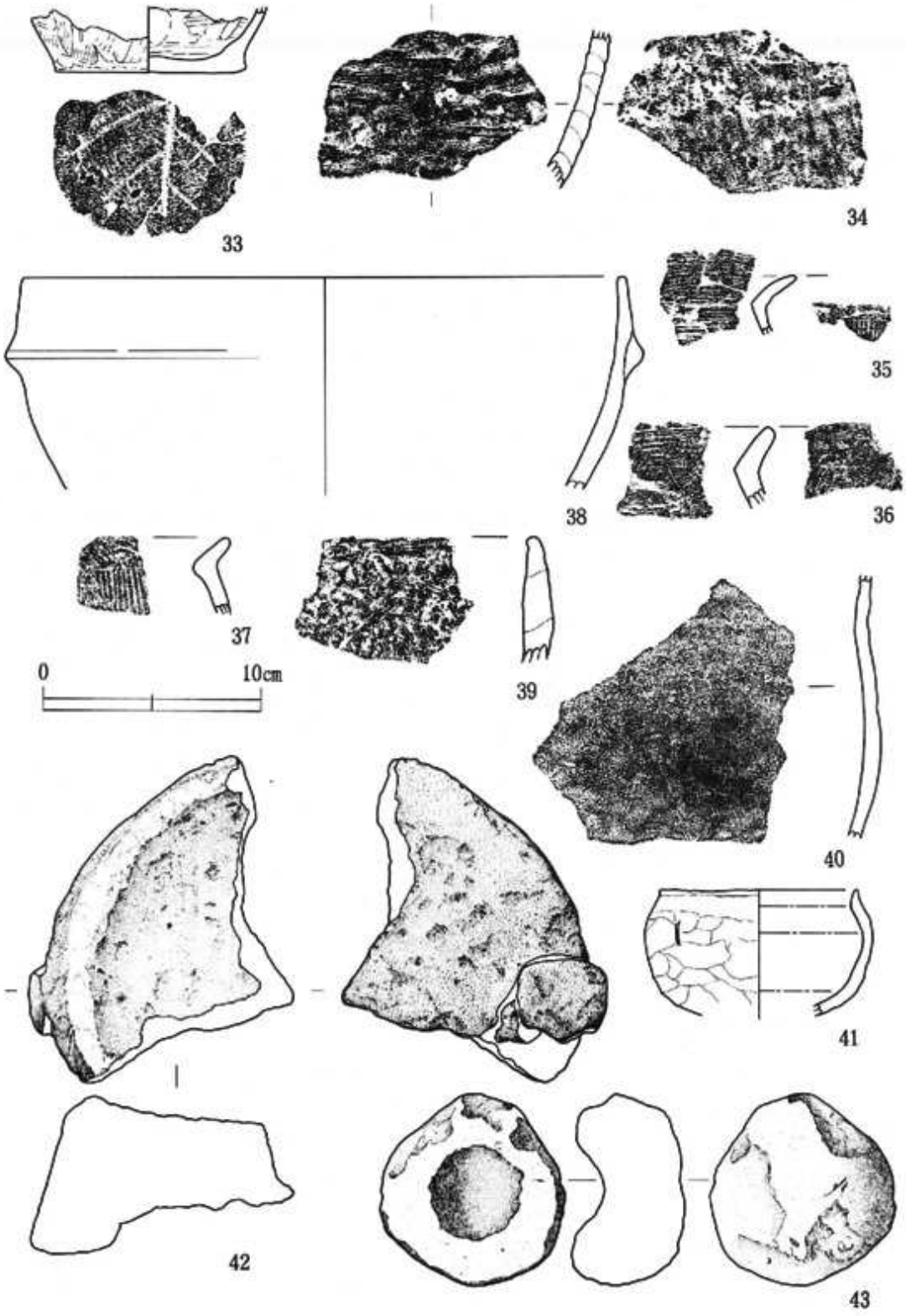
第12図　1号凹地出土遺物　(1／3)



第13図　遺構外出土遺物　(1／3)



第14図　遺構外出土遺物　(1／3)



第15図　遺構外出土遺物　(1／3)

番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径	胎土	色調（内面/外面）	整形・特徴・その他
23	土師器	椀	—, —, 3.2	粗い赤・白色粒子を含む	黒色 にぶい橙色	内黒土器 内面—撫で 外面—ヘラ削り？磨滅により不鮮明 体部〜底部破片
24	土師器	皿	—, —, 5.8	赤色粒子を多く、細かい金雲母を少量含む	橙色 橙色底部にぶい黄橙色	内面—渦巻状暗文 外面—体部下半〜底部回転ヘラ削り 2／3残
25	土師器		—, —, —	赤・白色粒子を含む	橙色 黄橙色	内面—撫での痕がみられる 破片
26	土師器	鉢	—, 12.8, —	金雲母、赤・白・黒色粒子を含む	橙色	内面—暗文 外面—磨滅により不鮮明　口縁部〜体部破片
27	土師器	鉢	—, 12.2, —	細かい白色粒子と金雲母少量を含む	橙色	器面は撫で整形らしいが磨滅により不鮮明 口縁部〜体部破片
28	土師器	鉢	—, 19.3, —	赤・白色粒子を含む	橙色 にぶい橙色	内面—撫で、横走する凹部はヘラ削りか？ 口縁部〜体部破片
29	土師器	S字状口縁台付甕	—, 15.7, —	赤・白・黒色粒子を含む	にぶい橙色	内外面—S字状口縁部横撫で 一部煤けている 口縁部破片
30	土師器	壺	—, —, —	赤・白・黒色粒子を含む	浅黄橙色 一部橙色	内外面—口縁部横撫で、輪積痕がみられる 頸部付近破片
31	土師器	壺	—, —, —	粗い白色粒子、赤・黒色粒子を含む	にぶい橙色	内外面—横撫で、輪積痕がみられる 頸部付近の破片
32	土師器	甕	—, 25.8, —	金雲母の目立つ砂粒を含む	にぶい橙色	内面—口縁部・胴部共に横撫で 外面—口縁部横撫で、胴部縦斜め方向の撫で 口縁部破片
33	土師器	甕	—, —, 9.8	金雲母、白・黒色粒子を含む	明赤褐色〜にぶい褐色	内面—横撫で 外面—縦方向の斜め刷毛目 底部木葉痕あり　底部破片
34	土師器	甕？	—, —, —	砂粒を含む	明黄褐色	内面—ヘラによる雑な横撫で 外面—縦方向に刷毛目の跡があるが磨滅により不鮮明 輪積痕あり　胴部破片
35	土師器	甕	—, —, —	金雲母の目立つ砂粒を含む	赤褐色	内面—口縁・頸部横刷毛目 外面—頸部縦刷毛目　口縁部破片
36	土師器	甕	—, —, —	金雲母の目立つ砂粒を含む	にぶい黄橙色	内面—横方向刷毛目 外面—縦方向刷毛目が施されていたと思えるが磨滅により不鮮明　口縁部破片
37	土師器	小甕	—, —, —	金雲母、白色粒子を含む	にぶい褐色 明赤褐色	内面—口縁横刷毛目 外面—縦刷毛目　口縁部破片
38	土師器	羽釜	—, 27.8, —	砂粒を含む	にぶい褐色 褐色	内外面—撫で調整 破片
39	土師器	羽釜	—, —, —	白色粒子を含む	にぶい褐色 暗褐色	内外面—撫で、煤けている 口縁部破片
40	土師器	内耳土器	—, —, —	赤・白色粒子を含む	にぶい赤褐色 にぶい橙色	内面—刷毛目がわずかにみられる 胴部破片
41	土器	鉢	—, 9.0, —	白色粒子を含む	にぶい黄橙色 灰褐色	内面—撫で 外面—雑な撫で、墨書痕らしきものがある 口縁部撫で　口縁部〜体部破片
42	石器	石皿				石材、安山岩 破片
43	石器	凹石				石材、安山岩

なお、本遺跡からは黒曜石の剥片が出土しており、写真図版19に掲載しておいた。

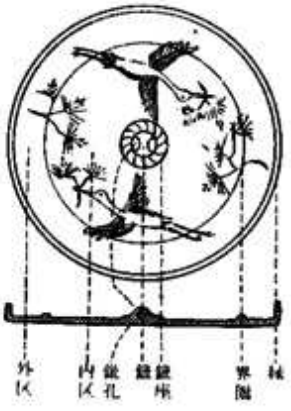
Ⅶ　水無遺跡出土八稜鏡

山下孝司

1　出土状況

今回の調査で八稜鏡が出土した。出土した地点でいうと、2号住居址ということになる。

2号住居址は隅円長方形の平面形で、東西約4.5m、南北約3.7mの大きさの竪穴であり、カマドは南壁東寄りに石組で構築される。鏡はこの住居址の北東側から遺構確認作業に際して発見されたものであり、住居址の埋没土からではなく確認面辺りからの出土となっている。確認作業で取り上げてしまったが、鏡面を下にしてあったようである。



第16図　鏡部位名称
（広瀬都巽『和鏡の研究』より）

2　資料観察（第16・17図参照）

直径8.3cm、厚さ1～6.5mm。青銅製であるが、鋳上がりは悪い。残存状況は比較的良好で、縁部分及び鏡面に剥落が見られる。鈕は饅頭形素鈕。内区に施される文様は、鈕を隔てて唐草と鳥が対に配される。鳥は鳳凰とも考えられるが、鳥腹（らしき箇所）が豊かに見えるのに反して頭部が不明瞭でそれと断定できない。界圏はへ字圏で、外区とつながる。外区には小乳突起が配される。この小乳突起は、本来3個1組で、八分割された外区に合計24個付けられるもののようである。縁は蒲鉾式中縁（断面では上半部分が三角形）で厚さ約5.5mmとなっている。鏡面には平行に筋が走っており、木目が付着したものと思われる。これは鏡面を下にこの鏡が木の箱に入れられていたことを物語るものであろう。

第17図　水無遺跡出土八稜鏡　（1／1）

鏡背面の施文の構図は、上下・左右が対称に配置される形で構成されており、いわゆる唐式鏡の唐草双鳥文系の鏡である。八稜鏡は外周を八分割し切り込みをつくり、八つの弧の中央部分を尖らせているのが特徴的で、本資料は、鳥が定かではないが、唐草双鳥八稜鏡（からくさそうちょうはちりょうきょう）の呼称が適当と思われる。

3　資料の年代

八稜鏡は、唐鏡（唐時代の中国で作られた鏡。白銅製が多く、方形・円形のほか、八花鏡・八菱鏡などがある。）から、和鏡（平安時代後期から江戸時代にかけて、日本でつくられた鏡で、中国の文様ではなく日本独自の意匠を鏡背面に施文する。）に至る中間的な形式とされ、奈良時代末から平安時代にかけてつくられた。一般的に鏡は、11世紀末から12世紀初頭には、松・藤・菊や鶴・千鳥・雀といった日本人好みの花鳥に文様が和様化してしまい、和鏡は11世紀後半には出現するという。平安時代の文化が大陸文化を吸収ながら漸次日本独自の展開をするなか、奈良時代の唐鏡を模した唐式鏡は和様化に達する前の過渡的な段階の鏡と位置付けられており、八稜鏡も和様化に至る途中の唐式鏡ということになり、10世紀後半には、鈕を中心に瑞花と瑞鳥の上下・左右対称構成（瑞花双鳳八稜鏡）が確立する。[1]

鏡の実年代や編年を考えるうえで、紀年銘を有する鏡は年代決定に効力があるが、八稜鏡においては紀年銘をもつ資料は限られる。最古のものとして、広島県宮島町の中村隆燈氏所蔵の瑞花双鳳八稜鏡には永延二年（988）の銘があり、また東京芸術大学蔵の瑞花双鸞八稜鏡には寛弘四年（1007）の銘があり、これらは八稜鏡の年代決定の定点となっている。[2]本資料には他の大多数の八稜鏡と同様紀年銘がなく類推するしかないが、和鏡の出現が11世紀後半であり、瑞花双鳳という鈕を中心に文様の対称構成が確立するのが10世紀後半とすると、唐草双鳥という文様構成の八稜鏡という点で、およそ10世紀後半以降11世紀前半に位置付けられよう。さらに２号住居址出土ということでみると、伴出遺物には小皿・羽釜・灰釉陶器があり、これらの編年的位置付けを考えることによって年代推定ができる。

古代末期の土器編年は、坂本美夫氏と森原明廣氏による研究成果がある。[3]坂本氏は10世紀末～12世紀末をⅠ～Ⅷ期の８段階に編年し、森原氏は10世紀中葉～12世紀末葉を第１期～第５期の５段階に編年している。これらは「甲斐型土器」消滅後の土器様相を、小皿・脚高高台坏・柱上高台皿・羽釜・灰釉陶器・白磁などの消長を基にまとめており、年代観は主に灰釉陶器の研究成果によっている。２号住居址出土土器を坂本氏と森原氏による編年に照らし合わせてみると、小皿は、坂本編年のⅢ期にあげられている二之宮遺跡第85号住居址の小皿と同形態で、森原編年では第３期に位置付けられよう。羽釜は、鍔が全周する形態のものと推定されるので、坂本編年のⅣ期以前、森原編年では第３期以前ということになる。灰釉陶器の碗は、口径15cm、器高６cm、釉はつけがけ、外面体部下半はやや雑なヘラ削り、高台は内面が外傾し付け根が凹む、底部には微かに糸切り痕がみられる、口縁部は僅かに外反している形態で、丸石２号窯式期であろう。坂本編年ではⅢ期後半～Ⅳ期、森原編年では第３期にあたる。すなわち、２号住

居址出土土器は、坂本編年ではⅢ期～Ⅳ期、森原編年では第３期にあてはまることになる。なお、森原氏は森原編年第３期を、坂本編年Ⅲ期～Ⅳ期に対応するものとしている。年代的には、坂本編年Ⅲ期は11世紀第２四半世紀、Ⅳ期は11世紀第３四半世紀、森原編年第３期は11世紀前葉から11世紀後葉に設定されており、２号住居址出土土器も11世紀半ば前後に位置付けられることになる。

２号住居址の土器が11世紀半ば前後に位置付けられれば、八稜鏡も同時期ということになるが、先に鏡の年代をおよそ10世紀後半以降11世紀前半と推測しておいたので、土器と重なる時期をとると11世紀前半後葉ということになろうか。ここでは、本八稜鏡の年代を大きく11世紀前半代ととらえておく。

4　県内出土の八稜鏡（第18・19図）

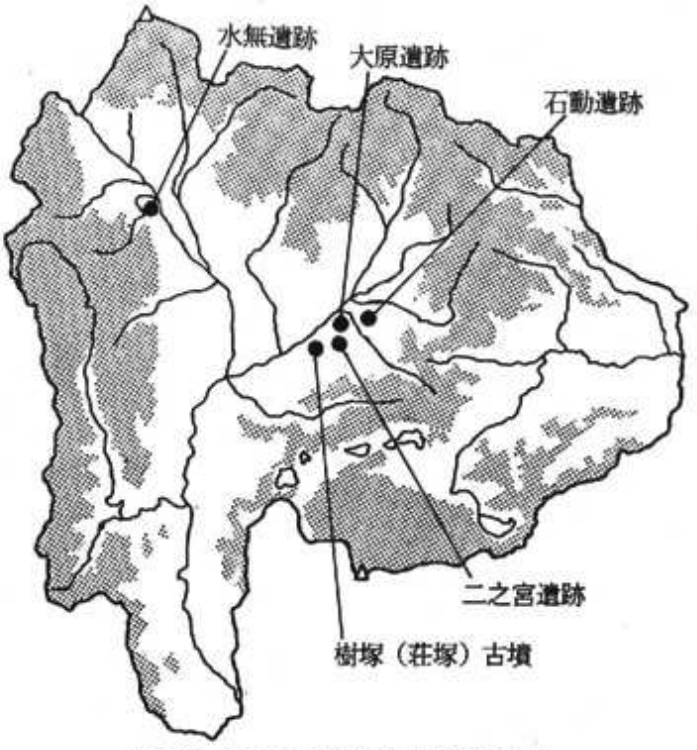
山梨県における八稜鏡の出土例は、管見の範囲では水無遺跡を含め５遺跡８面となっている。以下に、水無遺跡以外の八稜鏡について報告書などを参考にその概要を示す。

＜樹塚（荘塚）古墳[4]＞

本古墳は山梨県東八代郡八代町永井に所在し浅川右岸扇状地扇端に立地し、周辺は古墳が多く分布する地域となっている。古墳の形態は円墳で横穴式石室とされるが、現況は削平されてしまっていて詳細は不明である。ここからは、昭和26年（1951）に、須恵器・土師器、勾玉、管玉、金・銀環、直刀、甲冑、馬鈴などの遺物が豊富に出土しており、八稜鏡もこれらとともに２面発見されている。『八代町誌』では、古墳の時期は６世紀中葉前後に位置付けており、八稜鏡は10世紀後葉から11世紀初頭におかれている。町誌には拓本の写真が掲載されてはいるものの、法量等の記載はなく詳細が窺えない。残存状態は悪いが、草花八稜鏡あるいは瑞花八稜鏡と思われる。

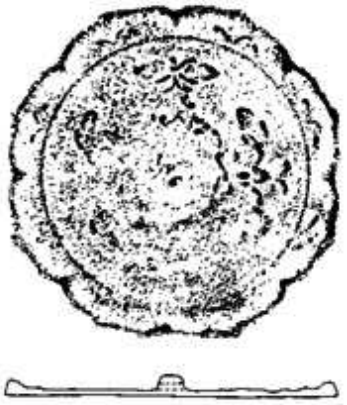
＜石動（いするぎ）遺跡[5]＞

本遺跡は山梨県東八代郡一宮町末木に所在し、金川右岸扇状地上に立地する。周辺には甲斐国分寺・国分尼寺があり、平安時代の集落遺跡が分布している。ここからは瑞花双凰八稜鏡２面（第19図１・２）、唐草双凰八稜鏡１面（第19図３）の計３面の



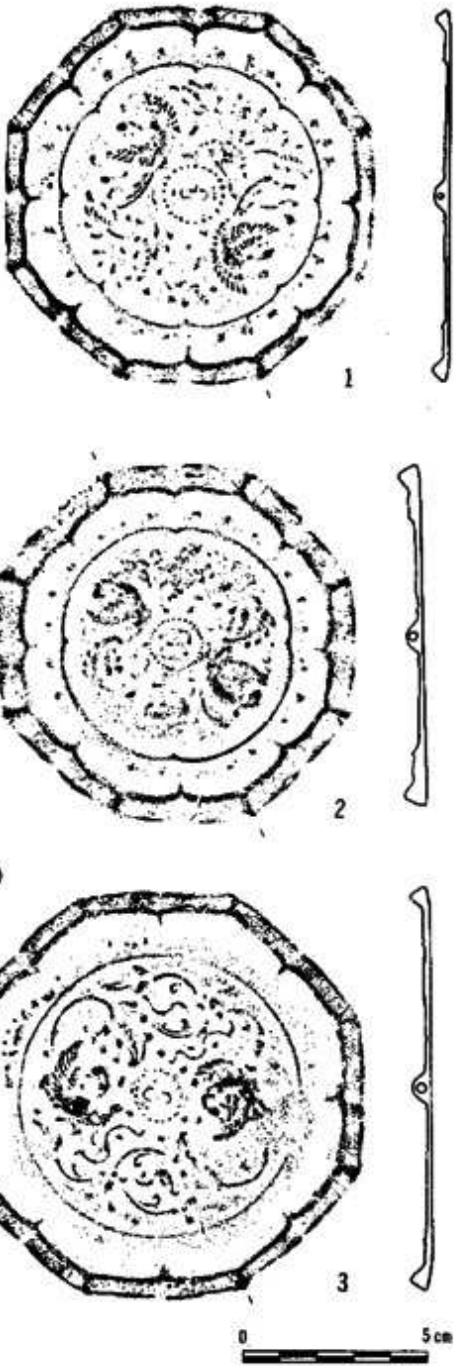
第18図　山梨県八稜鏡出土遺跡位置図

樹塚（荘塚）古墳出土八稜鏡
（『八代町誌』上巻 昭和50年〔1975〕より）



二之宮遺跡出土八稜鏡（1／2）
（『二之宮遺跡』山梨県教育委員会・日本道路公団 1987より）

大原遺跡出土八稜鏡（1／2）
（一宮町教育委員会提供）



石動遺跡出土八稜鏡（1／2）
（坂本（菊島）美夫「山梨県・一宮町不動出土の八稜鏡」『甲斐考古』12の1 1975より）

第19図　県内出土の八稜鏡

八稜鏡が地表下約１ｍの所から木片とともに出土しており、坂本美夫氏が「山梨県・一宮町不動出土の八稜鏡」と題して『甲斐考古』誌上に報告している。２面の瑞花双凰八稜鏡は、青銅製、鈕は裁頭円錐鈕で、鈕座には小乳凸起をめぐらし、内区上下に瑞花を置き、左右に鳳凰を配し、へ字圏を経て外区に移行、外区には３個１組の小乳凸起を８組配列し、縁は三角縁を呈するもので、大きさはそれぞれ直径10cm・厚さ１mm～４mmと、直径9.2cm・厚さ1.2mm～6.5mmとなっている。唐草双凰八稜鏡は、青銅製、鈕は裁頭円錐鈕で、鈕座には小乳凸起20個をめぐらし、内区上下に唐草を置き、左右に鳳凰を配し、段圏を経て外区に移行、外区は小乳凸起と思われるもの４個が配列され、縁は三角縁を呈するもので、直径10.7cm・厚さ１mm～５mmの大きさである。坂本氏は、瑞花双凰八稜鏡を11世紀前半、唐草双凰八稜鏡を11世紀後半頃に位置付けている。本例は掘削による偶然の発見であるらしく遺構の特定ができないが、木箱に入れて埋められた可能性もあろう。

<二之宮遺跡[6]>

本遺跡は山梨県東八代郡御坂町二之宮に所在し、金川左岸扇状地扇央部に立地する。周辺には古墳や古墳・奈良・平安時代の遺跡が濃密に分布している。中央自動車道建設に伴い昭和54年（1979）12月から昭和56年（1981）10月まで発掘調査が行われ、古墳時代の住居址157軒、奈良・平安時代の住居址218軒、その他各時代を含め全体では392軒の住居址が発見されている。八稜鏡は１面出土しており、東西に長い調査区域の東端で住居址の確認段階で鏡面を下にして発見された。どの住居址に伴うものかは判然としていない。鏡は、青銅製、鈕は素鈕で、直径９cm・厚さ約1.5mm～5.5mm程、縁は三角形を呈する。内区には草花のみがあり、外区には芽草を点在させている。草花八稜鏡であろう。発掘担当者の坂本美夫氏は、11世紀前後のものであろうとしている。

<大原遺跡[7]>

本遺跡は山梨県東八代郡一宮町坪井に所在し、金川左岸扇状地扇端に立地する。南側の扇央部には四ツ塚古墳群・姥塚古墳・姥塚遺跡・二之宮遺跡などが、金川を挟んだ東側には甲斐国分寺・国分尼寺などがあり、周辺には古代の遺跡が数多く分布している。一宮町農業地域工業団地造成にかかり、昭和63年（1988）７月から平成元年（1989）７月まで発掘調査が行われ、古墳時代から平安時代にかけて、358軒の住居址が発見されている。八稜鏡はW65号住居から１面出土している。鏡は、青銅製、鈕は素鈕で、直径11.7cm・厚さ約１mm～８mm、縁は三角形を呈する。内区上下に唐草を置き、左右に鳳凰を配し、外区には３個１組の小乳凸起を８組配列している。唐草双凰八稜鏡と呼ぶべきものであろう。W65号住居からは、およそ11世紀代の小皿と脚高高台坏が出土しており、本八稜鏡も同時期とみられる。

以上、県内出土の八稜鏡をみてきたが、土中埋設（？）、古墳からの出土、住居址からの出土と、それぞれに異なった性格の遺構から出土していることが理解できる。このことは、八稜鏡が多様な使われ方や扱われ方をしていたことを物語るものであろう。

5 鏡の用法

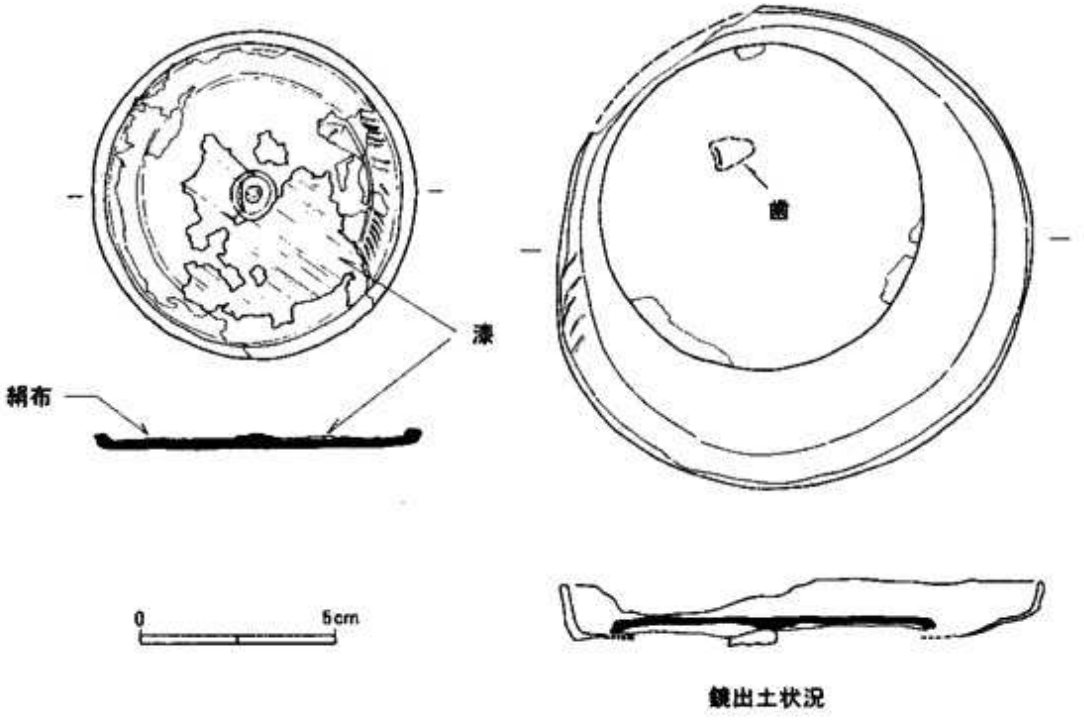
古墳時代の鏡は、化粧道具として使われたものではなく、剣・玉とともに祭祀のための宝器・呪具であり、首長の権威の象徴として用いられ、古墳の副葬品であった。古墳時代の後期になると副葬品に鏡が見られなくなり、飛鳥時代以降奈良時代には唐鏡が輸入され、仏教文化の展開とともに鏡も様々に扱われるようになる。寺院にかかわり、舎利容器とともに塔に納められたり、鎮壇具として地中に埋納されたり、仏像の荘厳に用いられたりした。また、修法祈祷や山岳修験の咒法に使われた。鏡は、物の真性をうつす神秘的な霊力をもつものとされ、魔除けや辟邪・破邪に威力のあるものと信じられていたのである。また、光を反射する鏡のなかに神仏の姿を重ね信仰の対象とした。平安時代後期になると、鏡は化粧道具として貴族層の間に定着するようになり増加する。さらに、遺跡からの出土もこの時期に増え、墳墓や経塚や霊山などから鏡が出土しており、経塚から出土する鏡は納められた経典を邪悪なものや魔物からまもる目的で置かれたものであり、霊山は信仰の場であり、呪術的・信仰的な側面においても多量に鏡が使われた。

本県における鏡は、古墳への副葬品として発見される古墳時代を一つの画期として、その後出土例はなく、前項でみたような平安時代の八稜鏡にいたり、平安時代末から鎌倉時代にかけては、柏尾山経塚（東山梨郡勝沼町）・秋山経塚（中巨摩郡甲西町）・雲峰寺経塚（塩山市）や塩山市下萩原浅間塚、国立神社に奉納あるいは埋葬されたとされる北堀遺跡例（東八代郡一宮町）といった経塚や信仰の場に出土している。[8] 県内出土の鏡も例外ではなく、呪術的・信仰的な用いられ方をしていたといえよう。では、水無遺跡の唐草双鳥八稜鏡はどうであろう。

まず、鏡の状態から見てみると、水無遺跡の八稜鏡は、文様が不鮮明で鋳上がりが悪いという点が特徴的である。八稜鏡が多量に出土した栃木県日光男体山々頂の例を挙げると、男体山々頂からは奈良時代から江戸時代にかけて山岳信仰の遺物が膨大な数発見されており、なかでも平安時代には鏡や仏具が多く奉納され、特に鏡は162面あり、しかもこのうち平安時代後期の瑞花双鳥八稜鏡や瑞花文八稜鏡が138面をもしめていて、これら八稜鏡は全体として薄手で、文様が鮮明さを欠き、鋳上がりが悪く、実用品としてではなく奉納のための儀鏡としてつくられたものとみられている。[9] この男体山々頂の例から推すと、水無遺跡のものも儀鏡の範疇でとらえられよう。

次に出土状況を見ると、水無遺跡と同様住居址からの出土例は二之宮遺跡や大原遺跡があり、これらはいずれも覆土（埋没土）からの発見となっている。住居址覆土（埋没土）出土の鏡は、八稜鏡ではないがこの他に韮崎市宮ノ前遺跡でも発見されている。

宮ノ前遺跡は市立韮崎北東小学校建設に伴い平成元年（1989）2月～平成2年（1990）4月に発掘調査が行われ、縄文時代から平安時代にかけて423軒の住居址が発見されている。[10] 鏡は第141号住居址覆土上面から出土しており、挽物の中に鏡面を上にして納められていた（第20図）。鏡は円鏡、銅製、鈕部には鈕座があり、直径8.3cm・厚さ約2mm～3.5mm、界圏は細い単圏



第20図　宮ノ前遺跡出土和鏡（1／2）　（『宮ノ前遺跡』報告書より）

で、縁は外傾式で厚い。内区と外区の文様は不明である。第141号住居址は奈良時代に位置付けられているが、鏡は縁の形式からみると平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての和鏡ということになろう。なお、この鏡には漆紙片と布片が付着しており漆紙と布に包まれていたものとされ、さらに永久歯の中切歯か側切歯とされる歯がひとつ鏡の下に納められていた。

化粧道具としての銅鏡は手入れを怠ると鏡面が酸化しすぐにくもってしまうので、使用しないときには必ず布でくるみ鏡箱に納めたという。宮ノ前遺跡例は、鏡を布と紙に包み箱に入れたものであり、化粧道具として使われていたことも推測できるが、歯が入れられており、しかも住居址の年代が奈良時代に置かれているので、鏡は後世何らかの目的で埋納された可能性が高い。この場合は住居址と鏡の年代が掛け離れているので、住居廃絶後数百年たって呪術的なものに鏡が使用され土中に埋められたのであろう。大原遺跡や水無遺跡などの例では、住居址の年代と鏡の年代が重なるので、年を久しく経てから埋められたものとは考えにくい。

樹塚（荘塚）古墳例は追葬あるいは後世における塚への信仰的なものとされ、石動遺跡例も信仰的なものと解釈されているが、住居址出土の鏡の場合、その住居の住人が至宝として所有していたものが残されたのか、住居廃絶直後に埋納されたものか、住居廃絶後時を経て埋納されたものか、住居にかかわりなく後世に埋納されたものか、判断はかなり難しいと言える。水無遺跡の八稜鏡は、儀鏡として何らかの信仰やまじないの対象になったものであり、木箱に入れられていた可能性が高く大切に保管されていたとも考えられるが、住居廃絶後に木箱に入れ

て埋納された可能性も捨て難い。本遺跡の所在地は、遺跡西側の一段高い段丘上にある宇波刀神社（「社記」に式内社とある）のかつての神社地であったとの伝承が残っており、遺跡北側の地はホウリヤシキ（神社につかえる神職の屋敷の意か）と呼ばれ、あるいはこれとのかかわりも想定できるかもしれないが、これ以上は推測の上に推測を重ねるばかりとなるのでやめておく。

6 おわりに

水無遺跡の発掘調査終了後整理作業の時点で、現段階での県内出土八稜鏡の数が比較的少ないことを知り、それらの集成と水無遺跡出土の八稜鏡を紹介することを目的として稿を起こしたが、浅学のため思うように文章がすすまなかった。「信仰」や「呪術」という言葉で鏡の用法を述べてきたが、具体的に当時の人々の心性がどのようなものであったのか理解できず、現時点では、鏡を何故土中に埋納するのか知り得なかった。この点に関して大方の御教示・御教授を頂きたいと願うものである。もとより専門に研究しているわけではなく、鏡に対する知識を全く欠くため、手近な資料や文献を基に八稜鏡の観察を行い年代決定をし、解釈を行った。文中には誤認や記載の誤りが多々あると思われるが、先学諸氏のご叱正をいただければ幸いである。

なお、本稿を草するにあたり、多くの方から種々様々な御教示・御協力を頂いた。文末ではあるが、御芳名を記して深く感謝の意を表したい。

鈴木稔・畑大介・市川昌子・平野修（帝京大学山梨文化財研究所）、坂本美夫・新津健・森原明廣（山梨県埋蔵文化センター）、末木健・今福利恵（山梨県立考古博物館）、瀬田正明（一宮町教育委員会）、伊藤正彦（韮崎市遺跡調査会）、越石政幸（円野公民館長）

註

(1) 前田洋子「和鏡の変遷」『考古学ジャーナル』185 1981、福井県立博物館『古鏡の美 －出土鏡を中心に－』1986。

(2) 中野政樹編「和鏡」『日本の美術』42 1969。

(3) 坂本美夫「甲斐国における古代末期の土器様相」『神奈川考古』第21号 神奈川考古同人会 1986、森原明廣「山梨県地域における古代末期の土器様相 －『甲斐型土器』の消滅とその後－」『丘陵』第14号 甲斐丘陵考古学研究会 1994。

(4) 『八代町誌』上巻 八代町役場 1975。

(5) 菊島（坂本）美夫「山梨県・一宮町不動出土の八稜鏡」『甲斐考古』12の1 山梨県考古学会 1975。

(6) 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第23集『二之宮遺跡』 山梨県教育委員会・日本道路公団 1987。

(7) 『大原遺跡発掘調査概報』 一宮町教育委員会 1990。本遺跡の正式な報告書はまだ刊行されておらず、八稜鏡の実測図等の資料は一宮町教育委員会の瀬田正明氏より呈示して頂いた。

(8) 萩原三雄・末木健『山梨の考古学』 山梨日日新聞社 1983、出月洋文「北堀遺跡出土の和鏡残欠について」『山梨県考古学協会誌』第6号 1993。

(9) 福井県立博物館『古鏡の美 －出土鏡を中心に－』前掲註(1)。

(10) 韮崎市教育委員会ほか『宮ノ前遺跡』 1992。

引用・参考文献

中野政樹編「和鏡」『日本の美術』42 1969。広瀬都巽『和鏡の研究』角川書店 1974。『韮崎市誌』下巻 1979。「特集・鏡」『考古学ジャーナル』185 1981。江坂輝彌ほか編『日本の考古学小辞典』ニュー・サイエンス社 1983。福井県立博物館『古鏡の美 －出土鏡を中心に－』1986。川越市立博物館『美の先達者たち －鏡にみる日本の美と心－』1991。斎藤忠『日本考古学用語辞典』学生社 1992。

Ⅷ まとめ

今回の発掘調査では、平安時代の竪穴住居址と水田跡などが発見された。出土した遺物は、土器・石器・土師器・須恵器・灰釉陶器など、当時の生活用具が中心となっている。特殊な遺物として、2号住居址から八稜鏡が出土しているが、これは前のⅦ章で詳しくとりあげている。以下に気がついた点をあげて、まとめにかえたい。

平安時代の住居址は僅かに2軒と少なく、時期的にも異なっている。1号住居址は甲斐型土器研究グループによる編年（『甲斐型土器　－その編年と年代－』山梨県考古学協会 1992）のⅪ期段階頃と思われ10世紀前半に位置付けられ、2号住居址は甲斐型土器が消滅した後の段階で、灰釉陶器と小皿が出ており、11世紀半ば前後に位置付けられる。約1世紀ほどの差があるが、どちらも竪穴で、カマドを有する形態は基本的に変化がない。ただし1号住居址は方形の平面形で東側中央にカマドがあるのに対して、2号住居址は長方形の平面形で南東角よりにカマドがつくられるという違いがある。概して角カマドは甲斐型土器が消滅してからの竪穴に多くつくられるようである。

本遺跡における住居址の少なさは、集落とみなすにはいささか抵抗があろう。このことは徳島堰を挟んだ東側の二反田遺跡も同様であり、平成5年（1993）の発掘調査成果では平安時代の2軒の竪穴住居址が発見されたのみである。両遺跡を合わせても住居は4軒で、しかも時期的には1軒のみの存在になってしまう。これは通称「離れ国分」と呼ばれる遺跡のあり方で、頻繁に居住が繰り返されその結果住居址が密集する遺跡＝「拠点的集落」とは異なり、一回だけの居住の跡とされている。何故一時期だけしか生活しなかったのかは、時と場合により異なっているのであろうが、本遺跡に住居を構えた人間は一代限りをここで暮らして他所へ移っていったのであろうか。11世紀半ばを最後に当該地域には人は住まなくなり、その後耕地へと変わっていったのであろう。

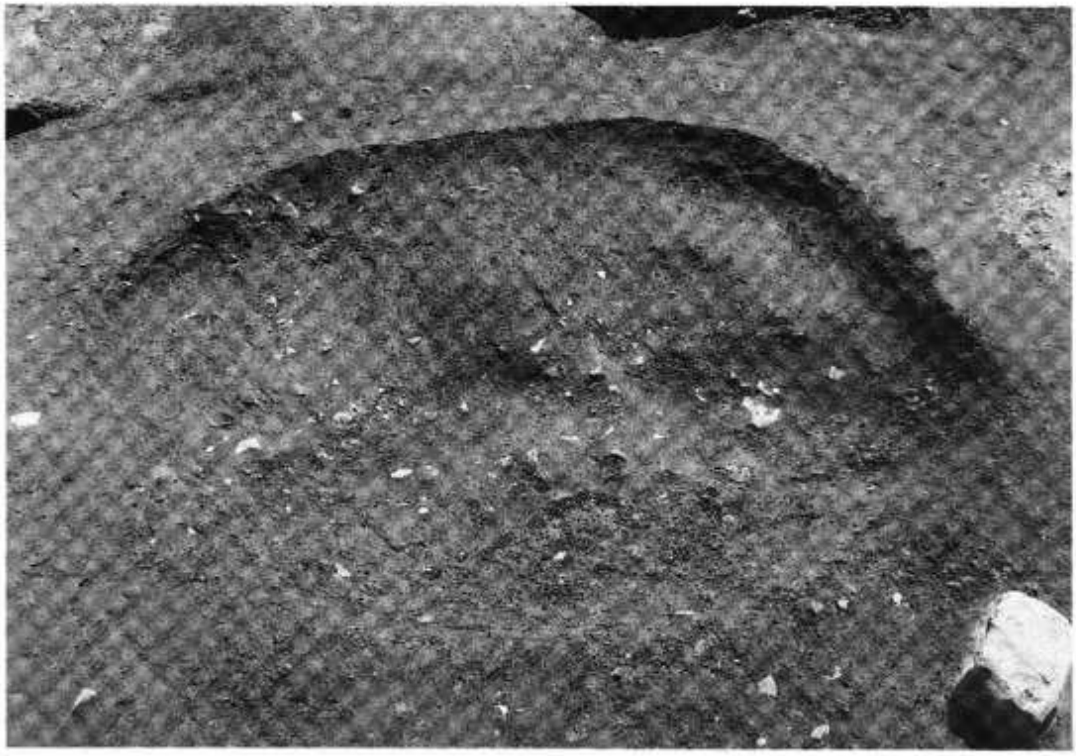
本遺跡で検出された水田跡は、住居址の確認面を覆っていた土よりも上層に形成されており、地形の傾斜に沿って水平方向に長方形に区画を設定し、段々につくられており、時期決定できるような遺物の出土がないので年代を比定できないが、比較的新しい時期のものではないかと思われる。

水無遺跡から発見された遺構・遺物は歴史を解明する資料として重要なものであるが、本報告書は限られた時間の中での作業によってまとめられたものであり、遺構と比較的依存状態の良い遺物をとりあげて掲載・呈示したにすぎないものである。調査成果と資料の検討や考察が詳細に行われておらず、不十分な点は否めないが、今後の調査・研究の一助として活用して頂けたならば望外の喜びである。

写　真　図　版

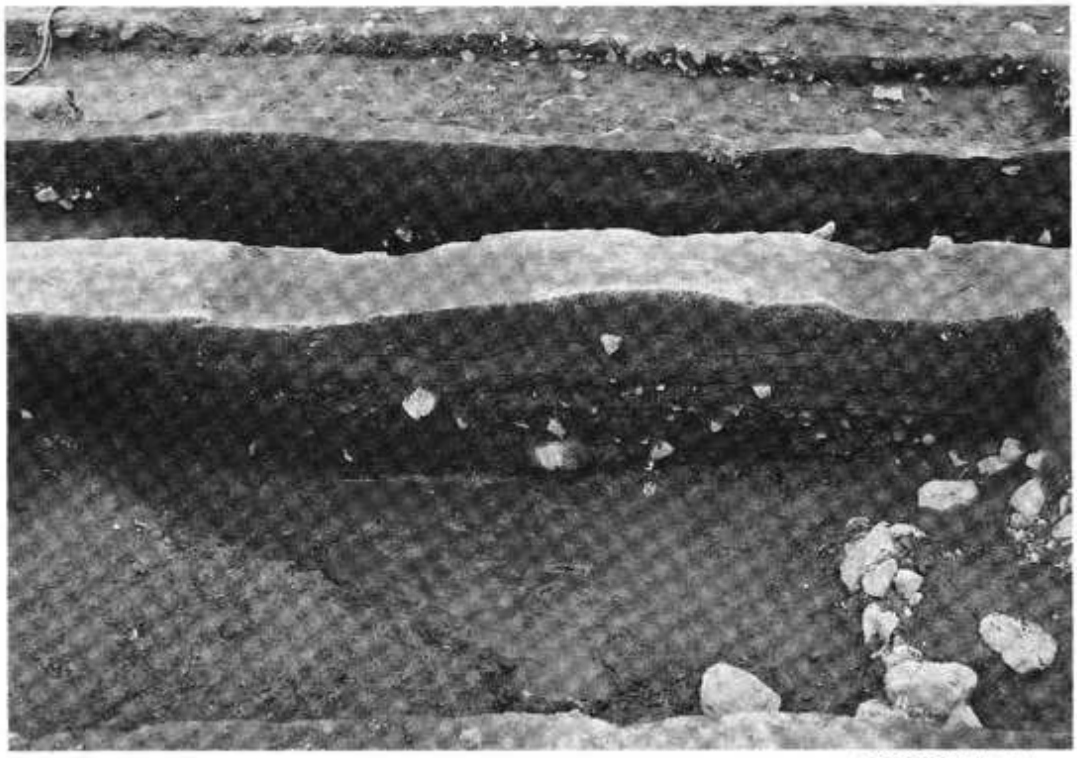
遺跡遠景

発掘風景



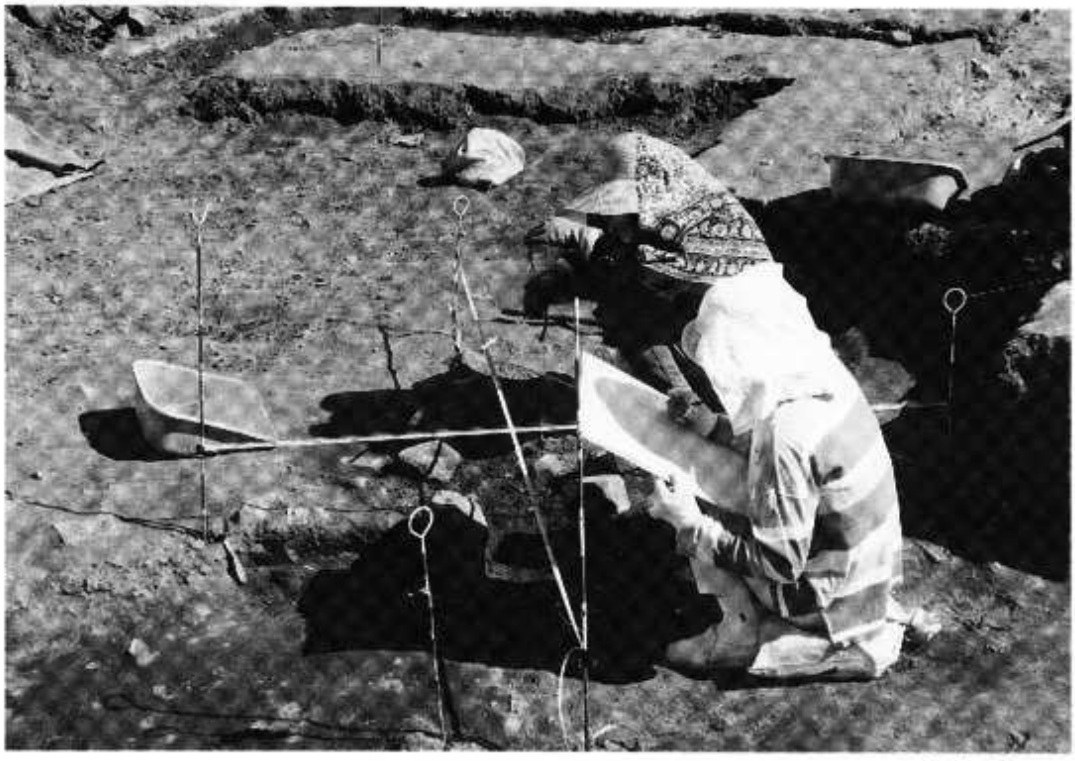
1号土坑

発掘風景

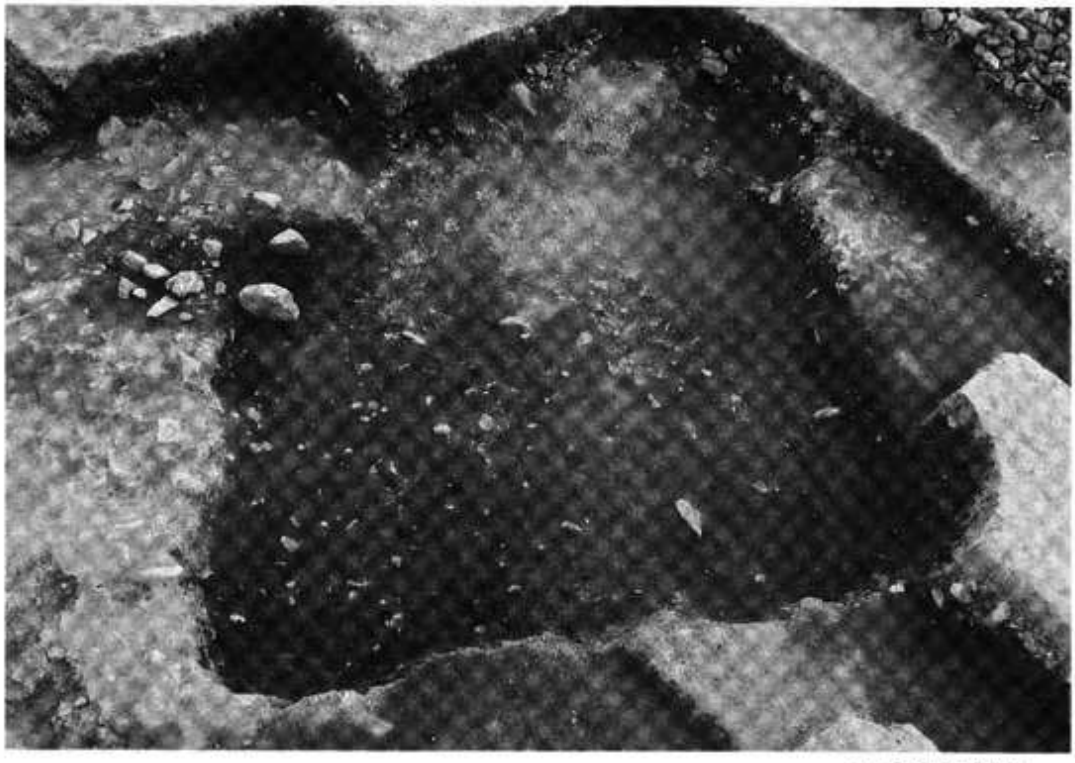


1号住居址土層

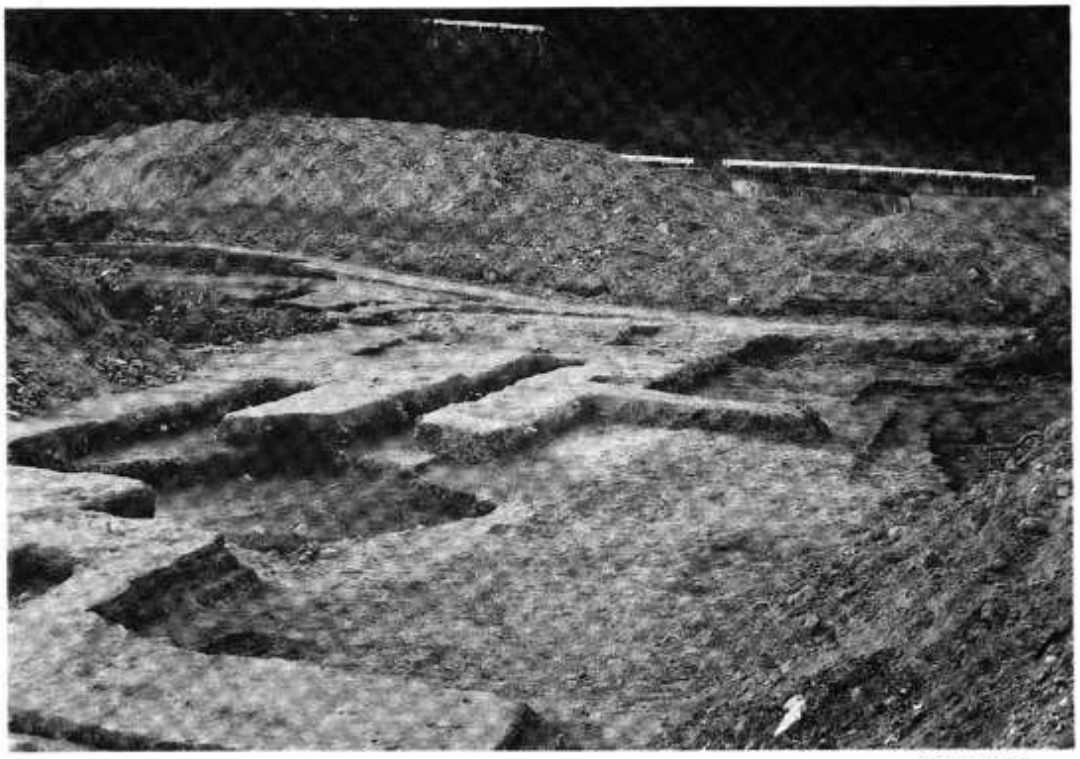
1号住居址



実測風景

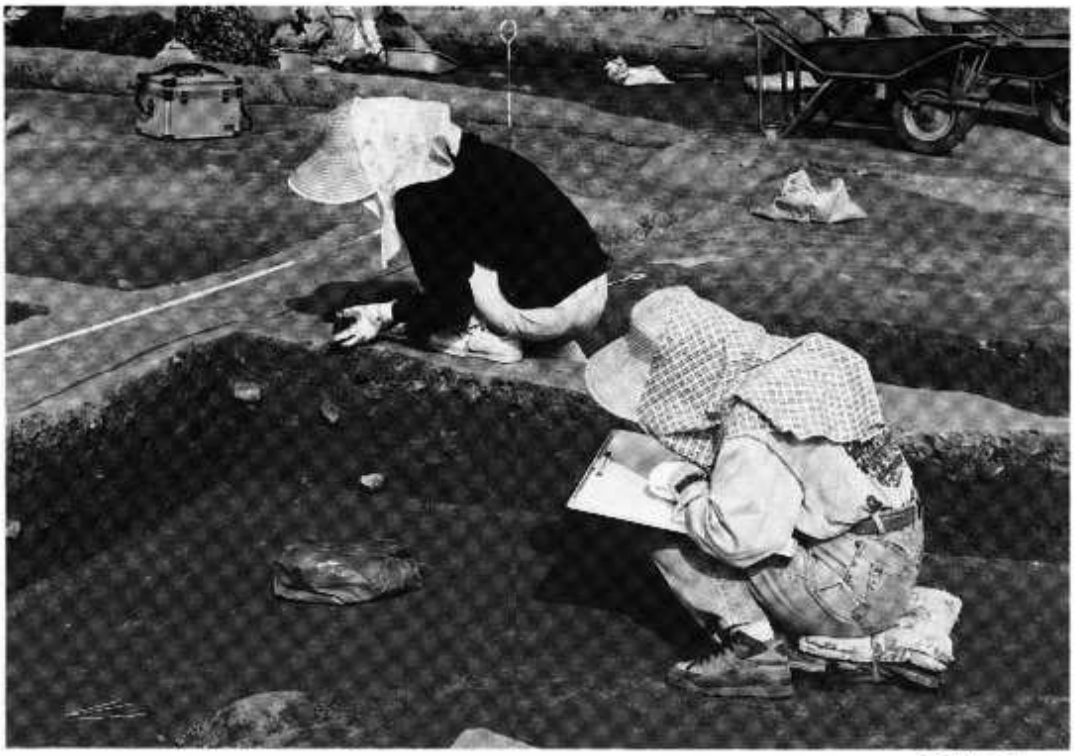


1号住居址完掘

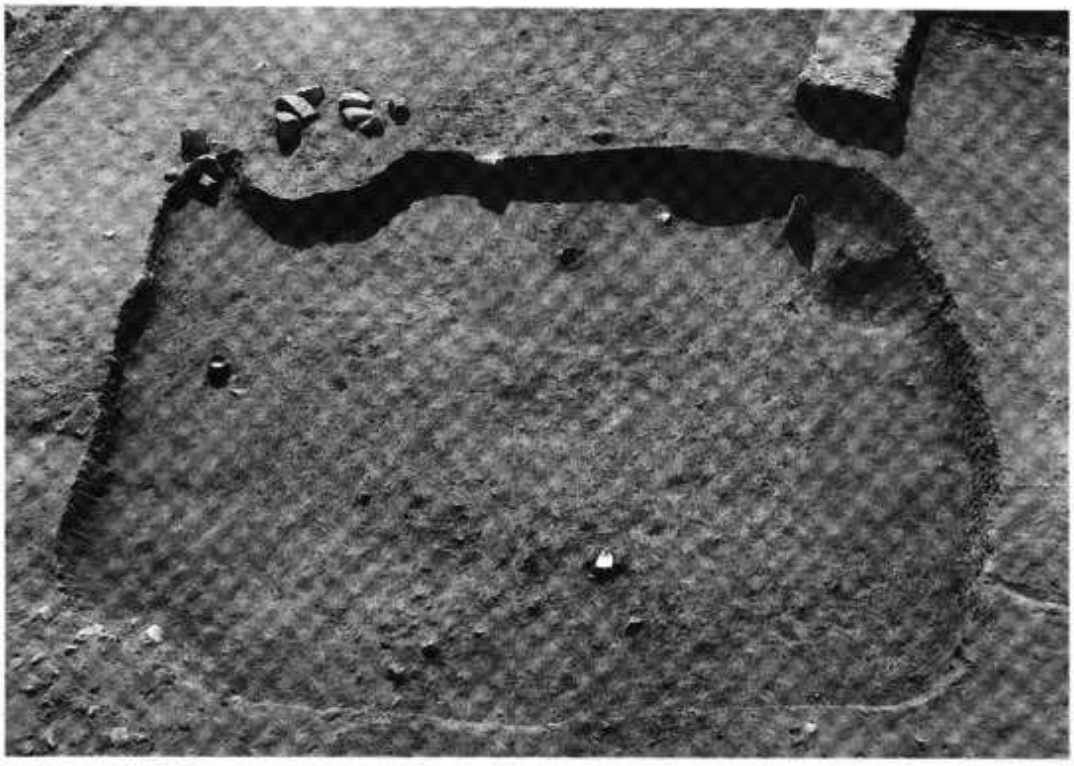


遺跡近景

鋤鎌かけ

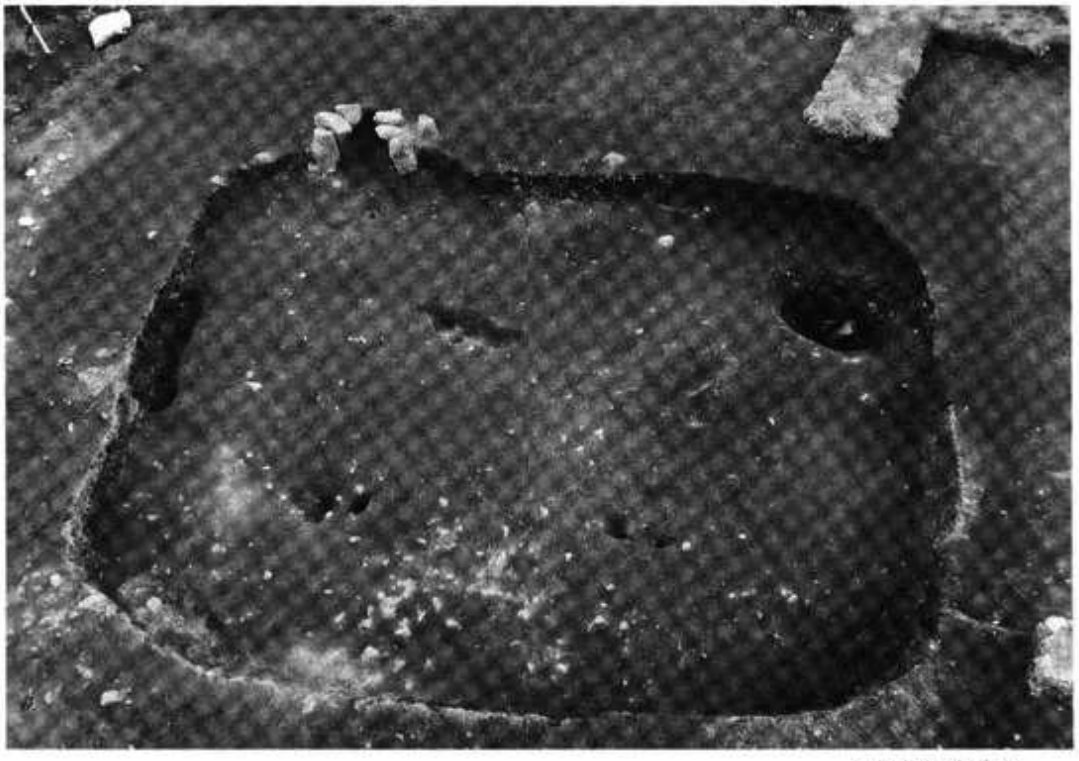


実測風景

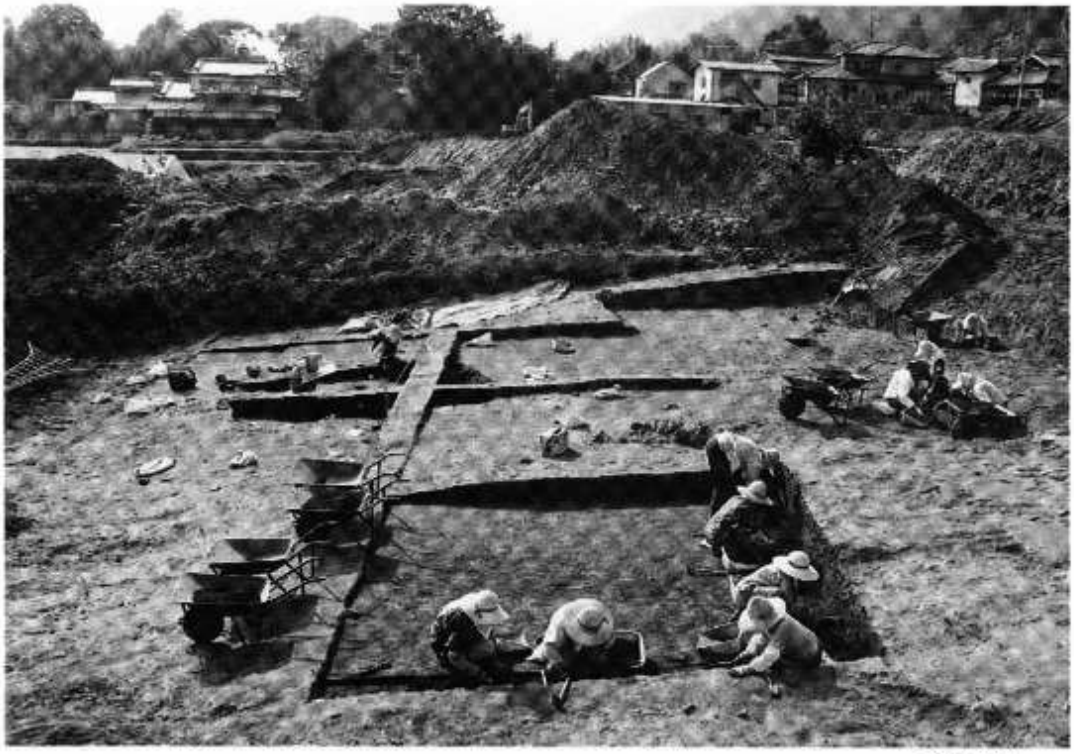


2号住居址

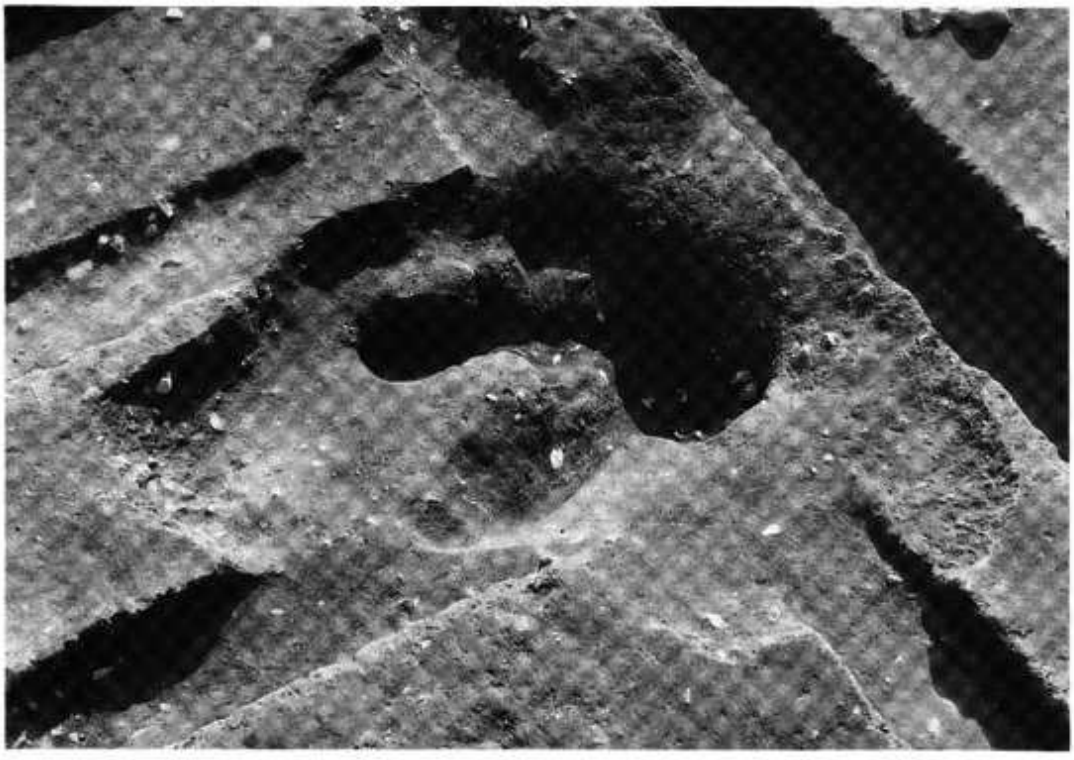
2号住居址カマド実測風景



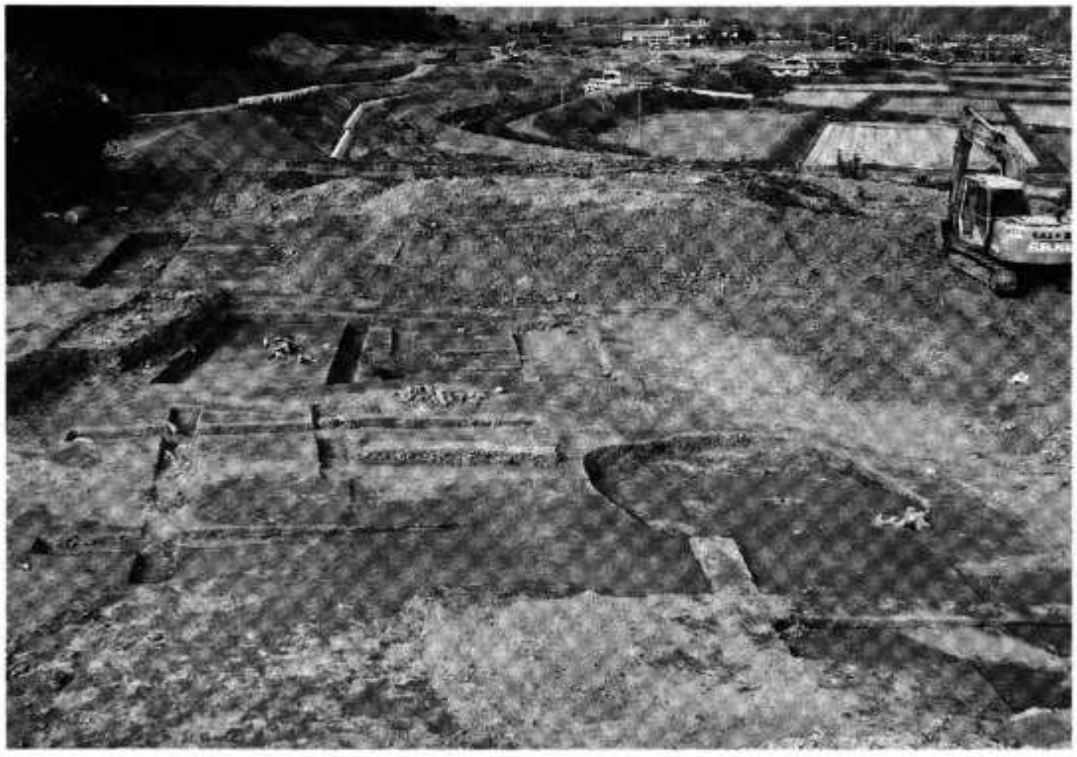
2号住居址完掘



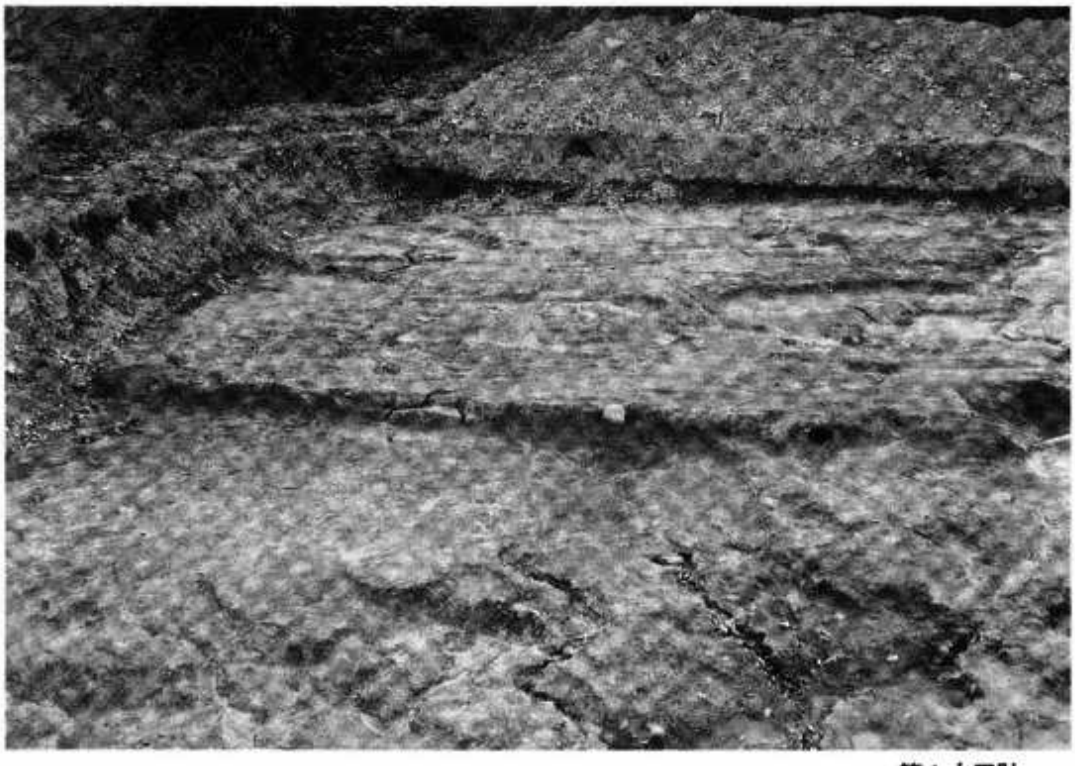
発掘風景



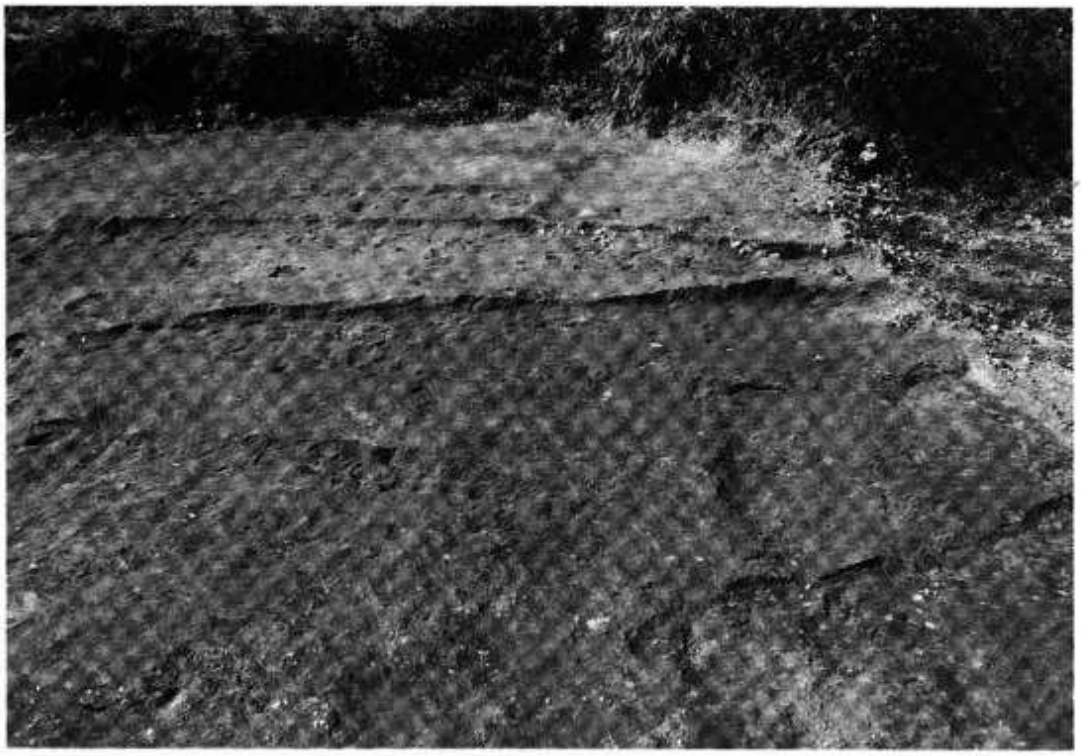
1号凹地



遺跡近景



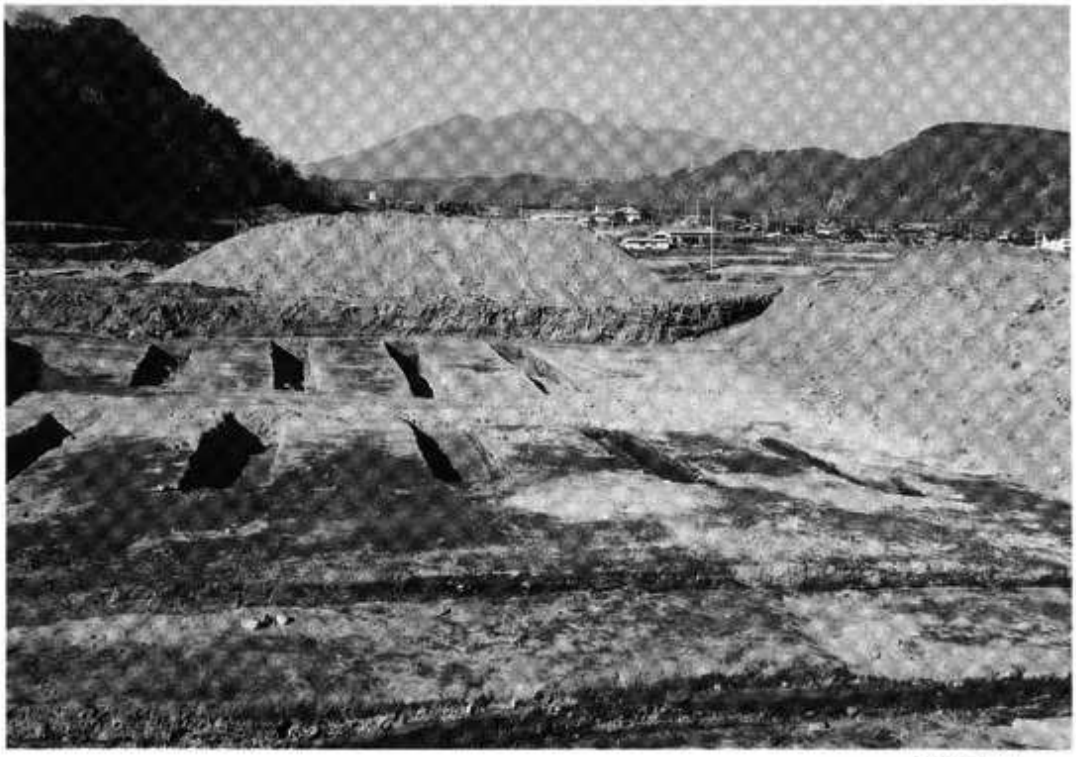
第1水田跡



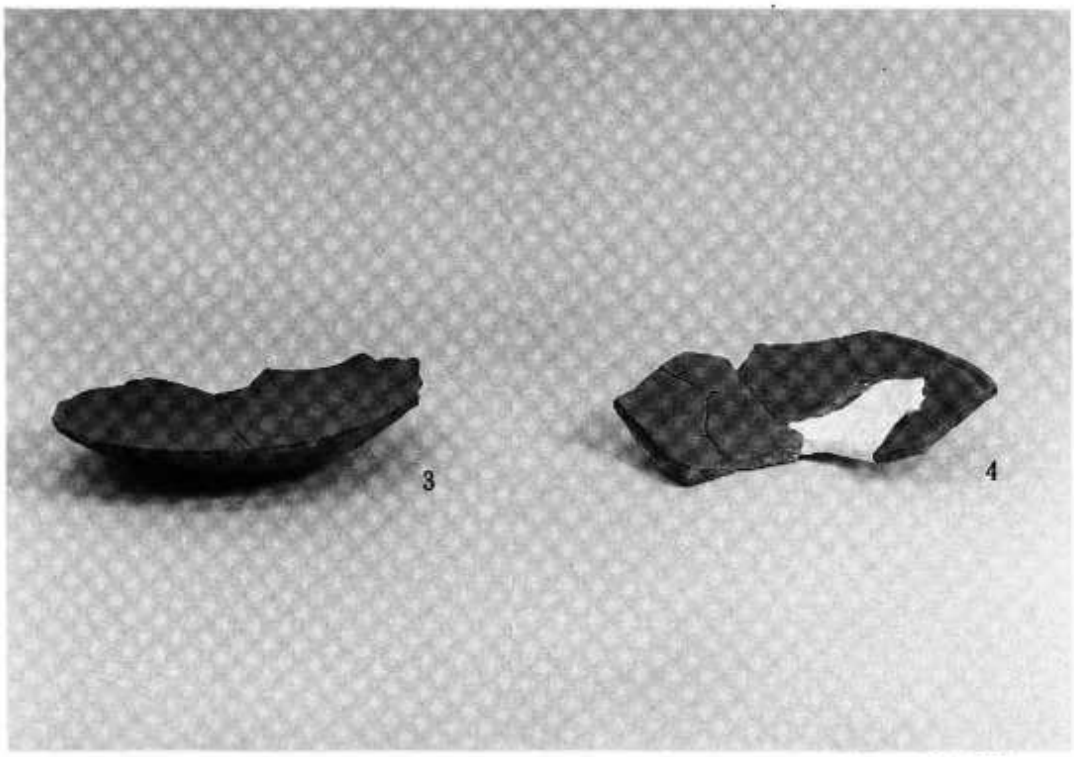
第2水田跡

遺跡近景

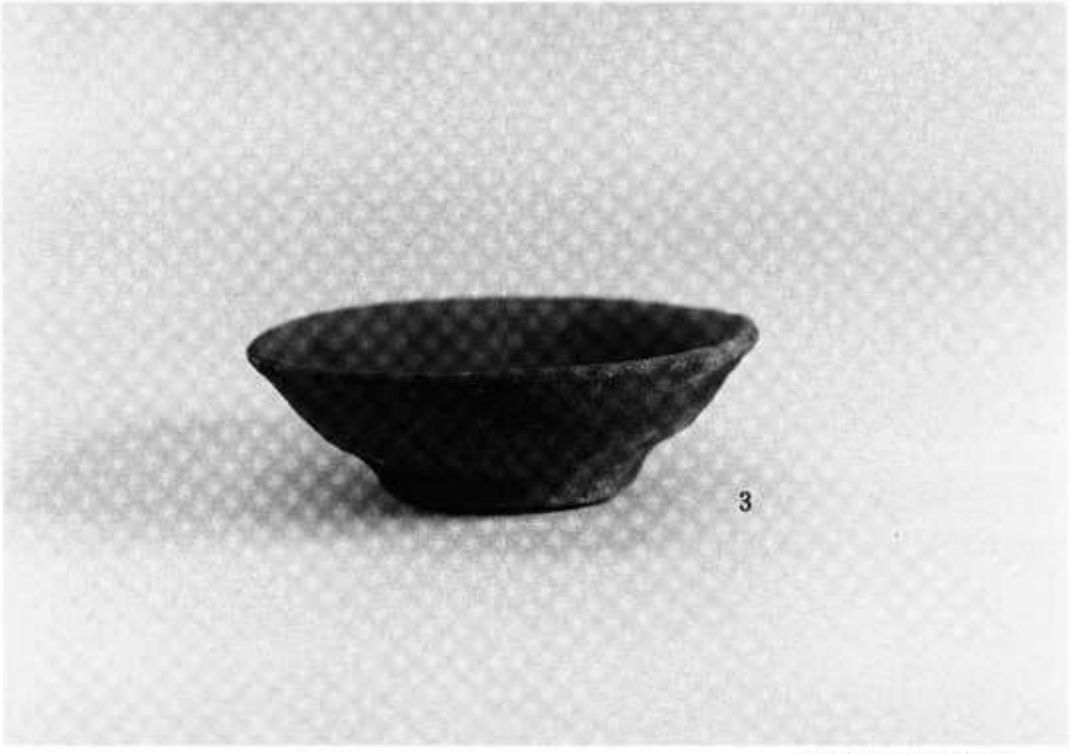
遺跡近景



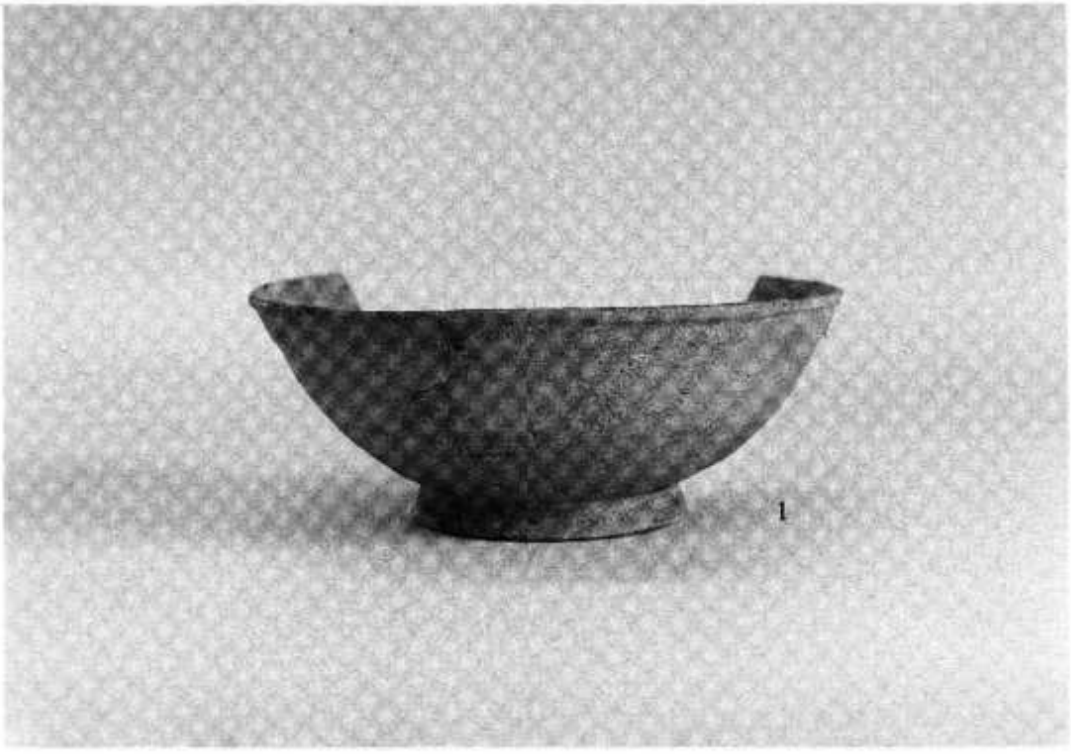
遺跡近景

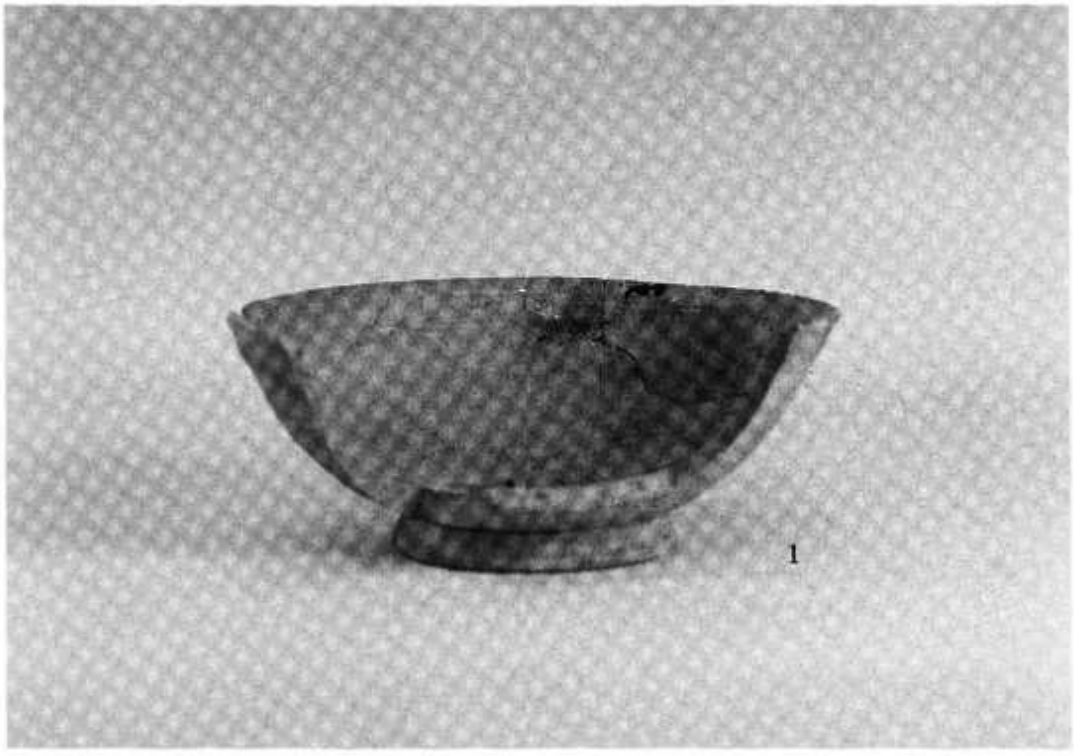


1号住居址出土遺物

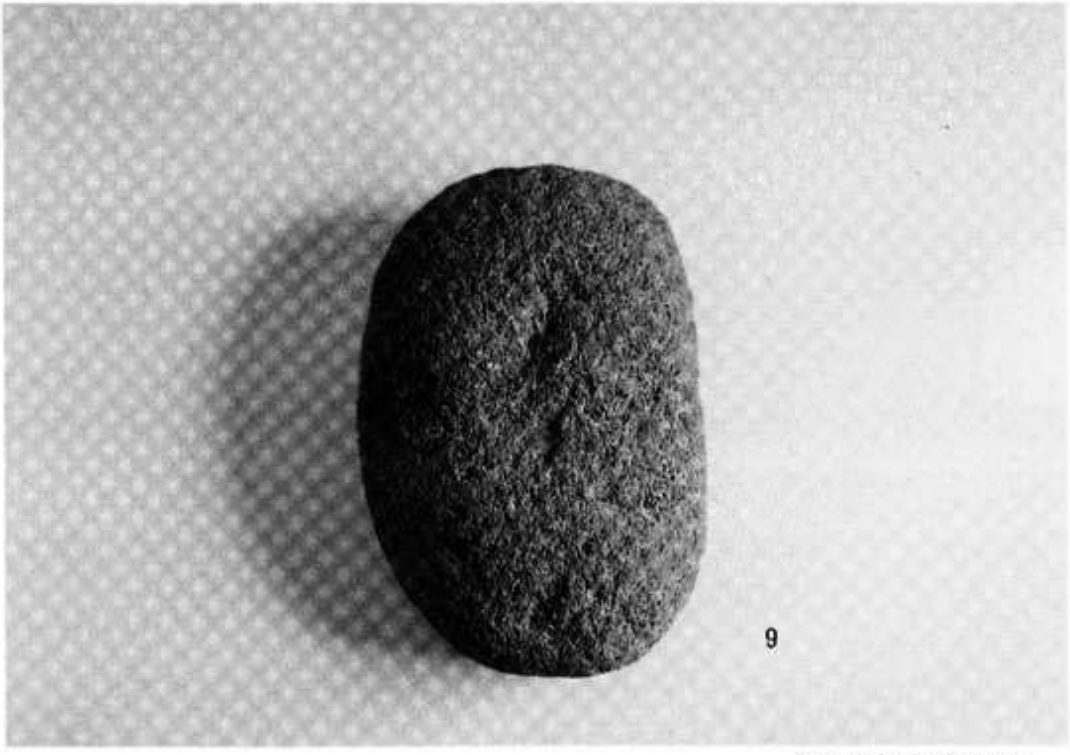


2号住居址出土遺物

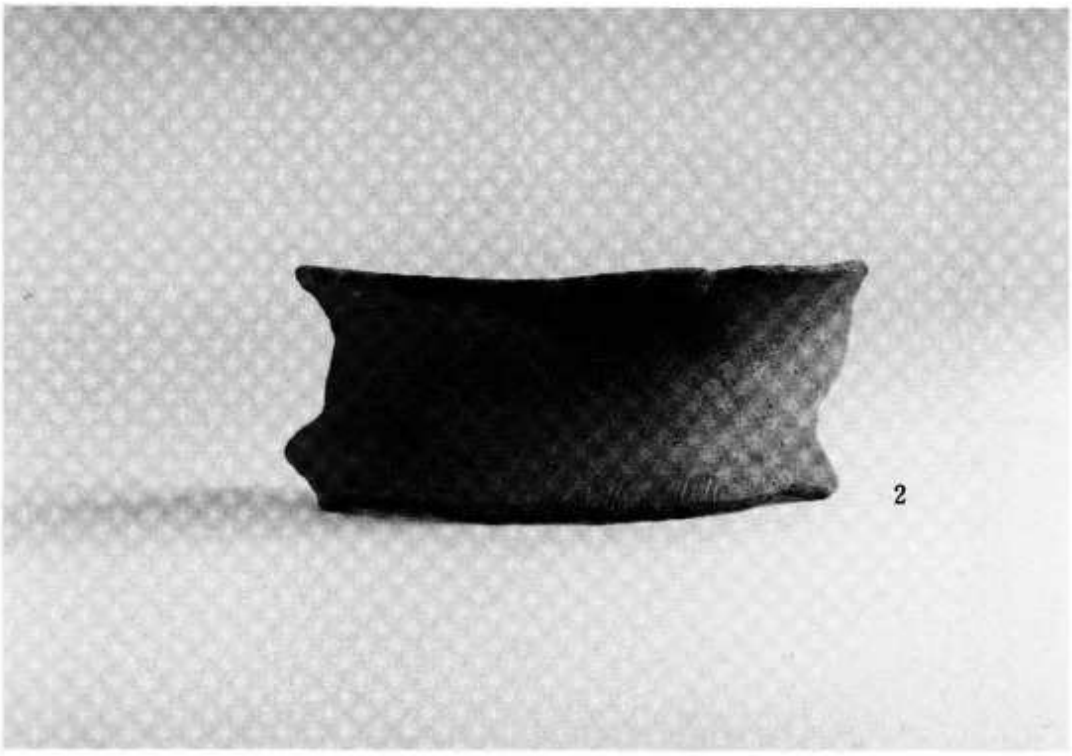




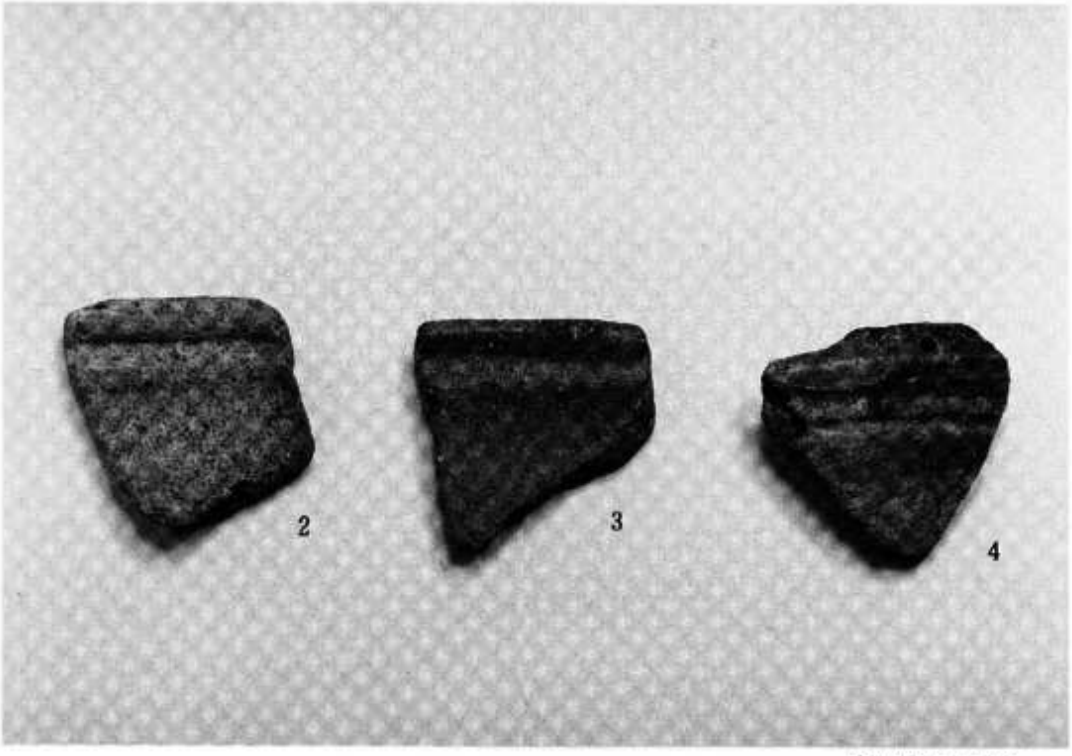
2号住居址出土遺物



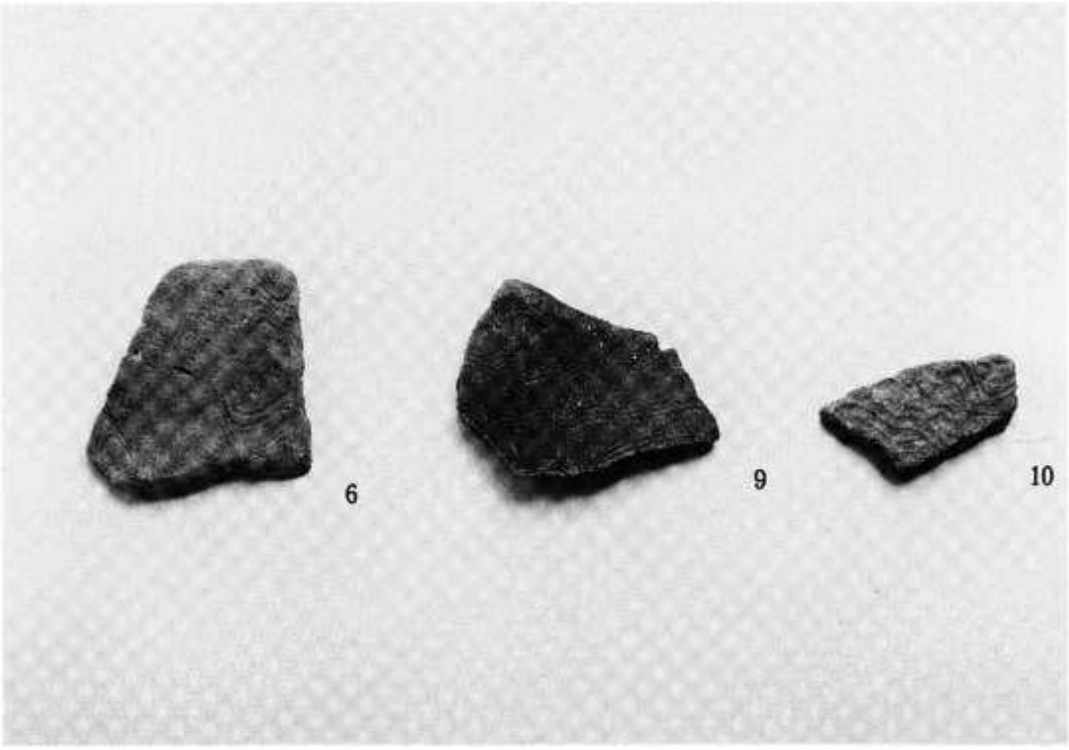
2号住居址出土遺物



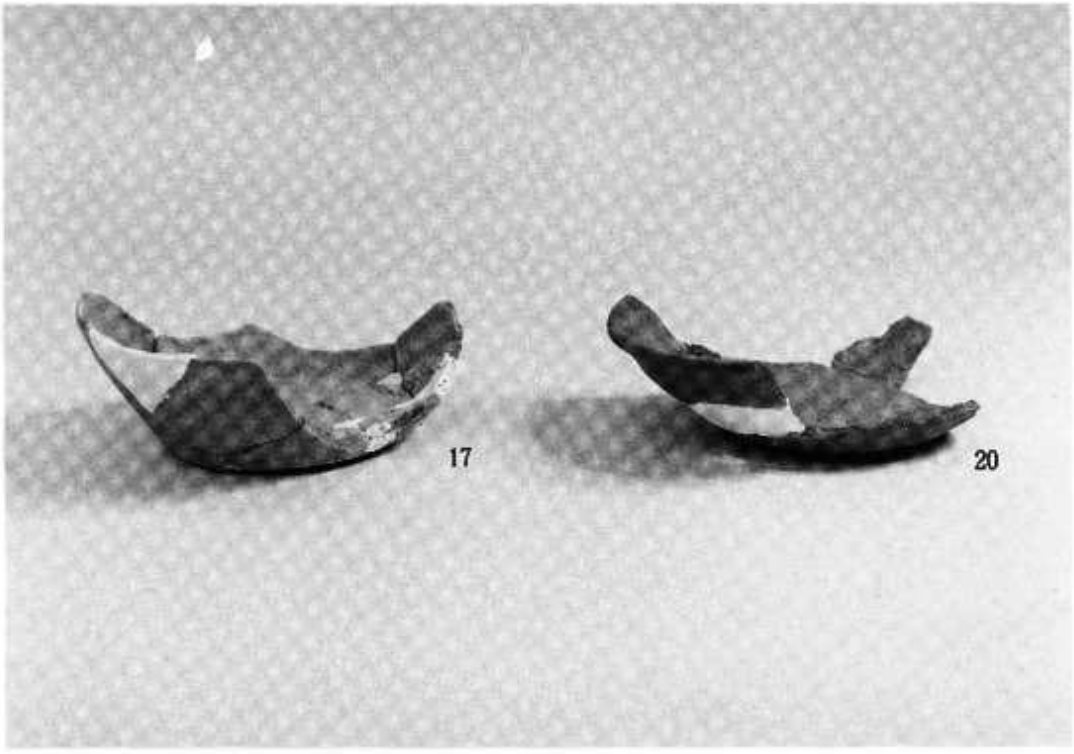
1号凹地出土遺物

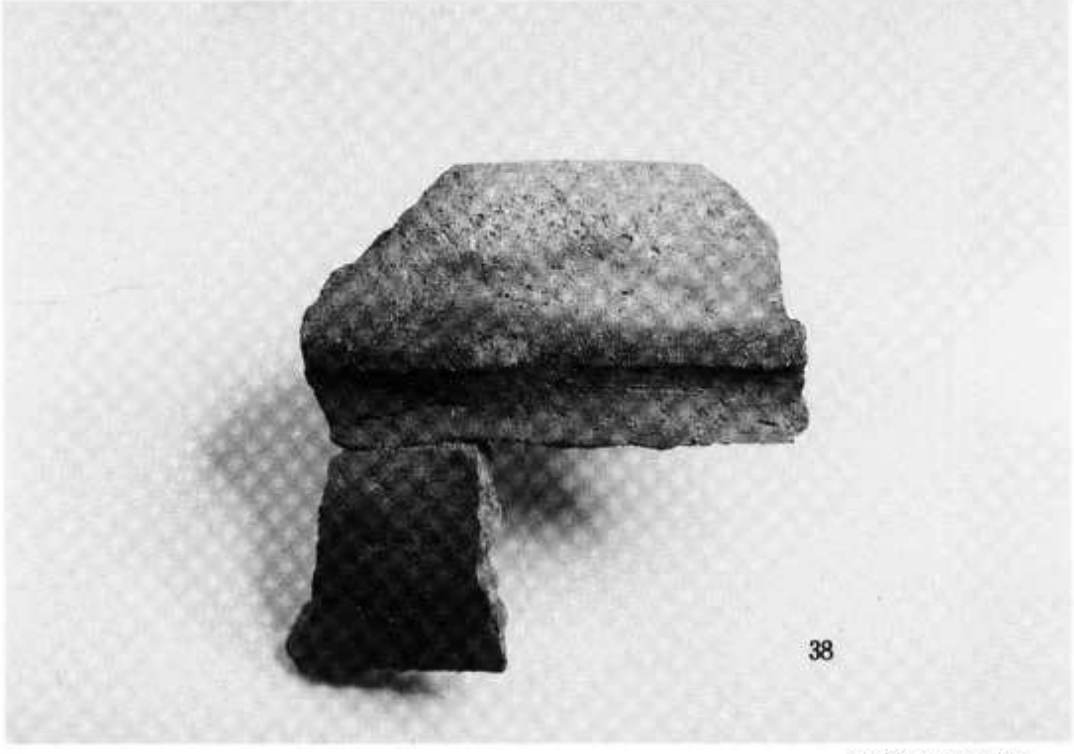


遺構外出土遺物

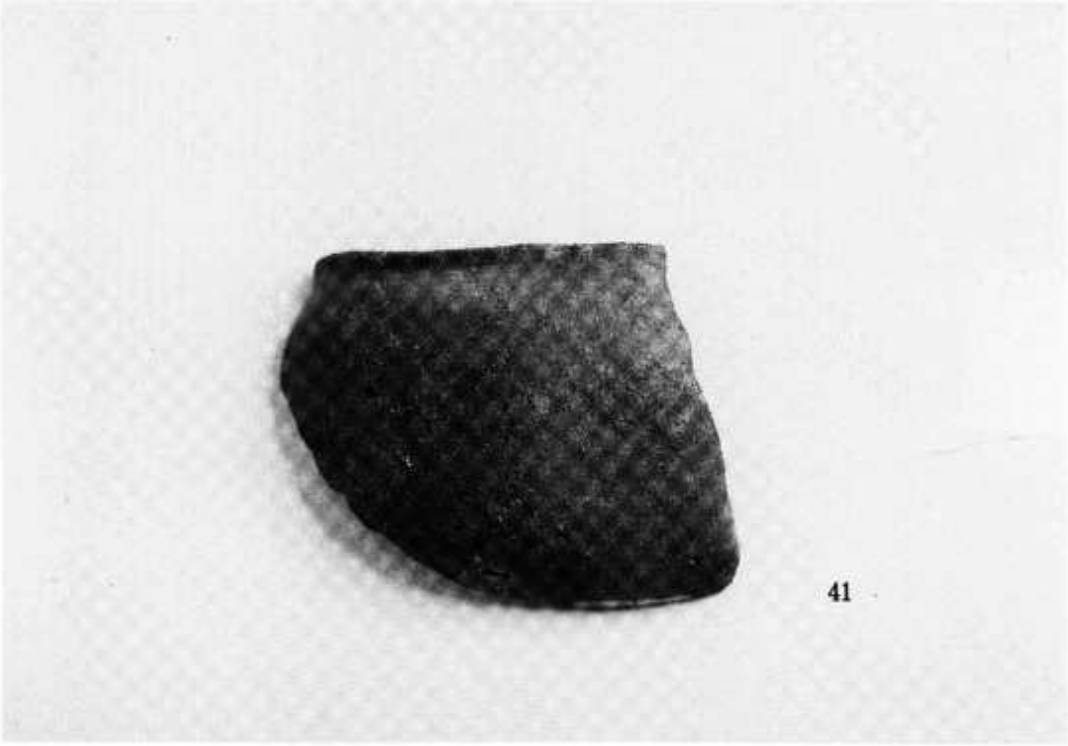


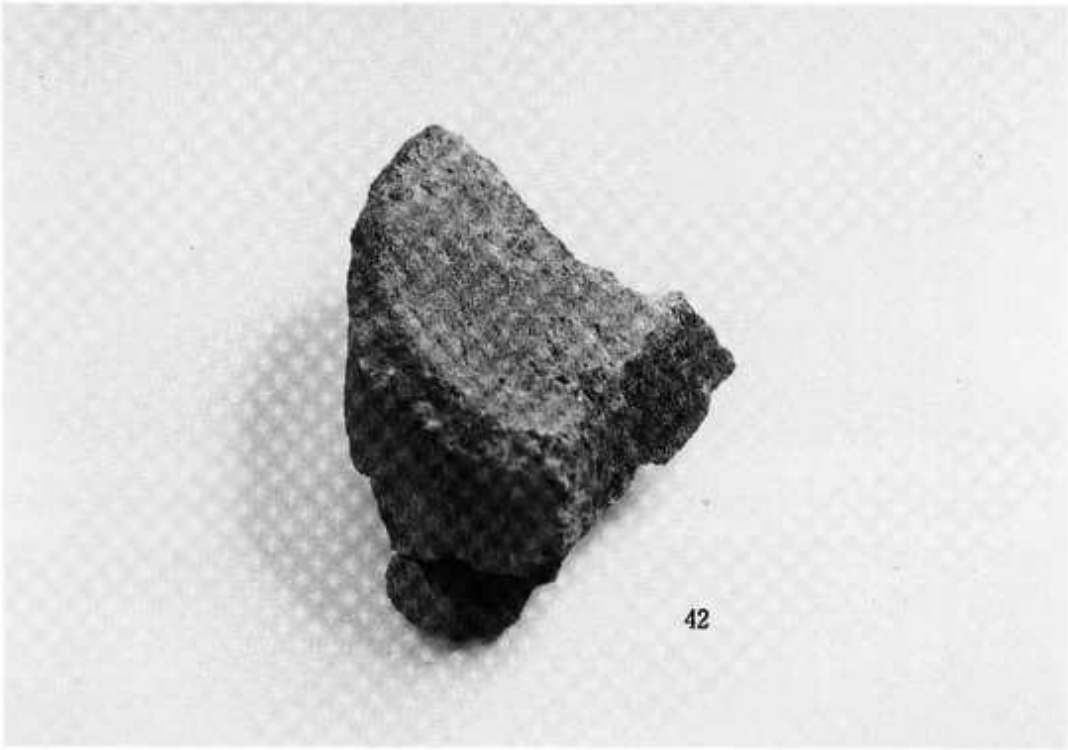
遺構外出土遺物



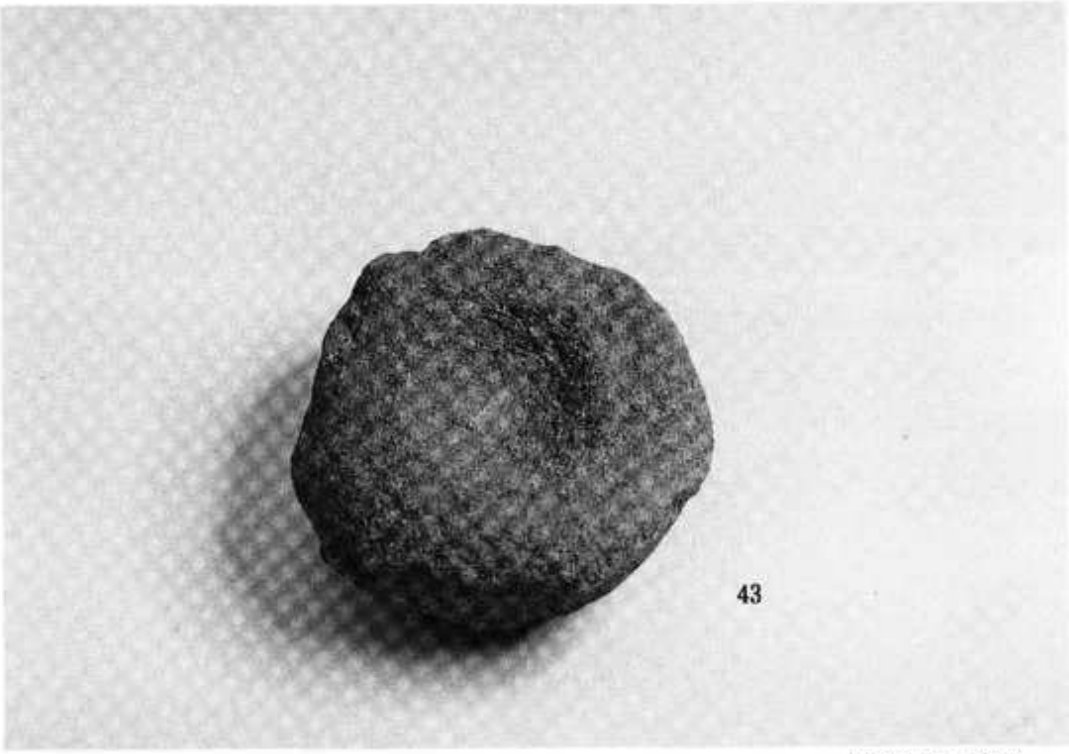


遺構外出土遺物



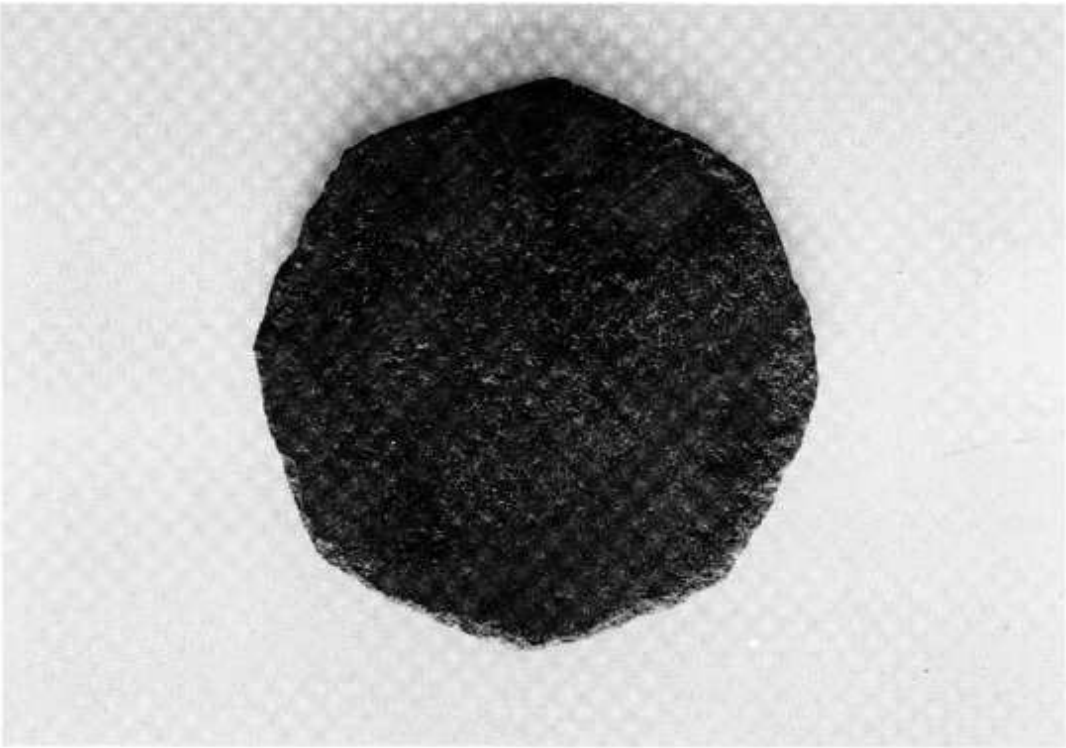


遺構外出土遺物



遺構外出土遺物

遺跡出土黒曜石



2号住居址出土八稜鏡（背面）

水　無　遺　跡

発行日　平成8年3月31日

発　行　韮崎市教育委員会
〒407 山梨県韮崎市水神一丁目3－1
TEL 0551－22－1111㈹

印　刷　アートプリント社